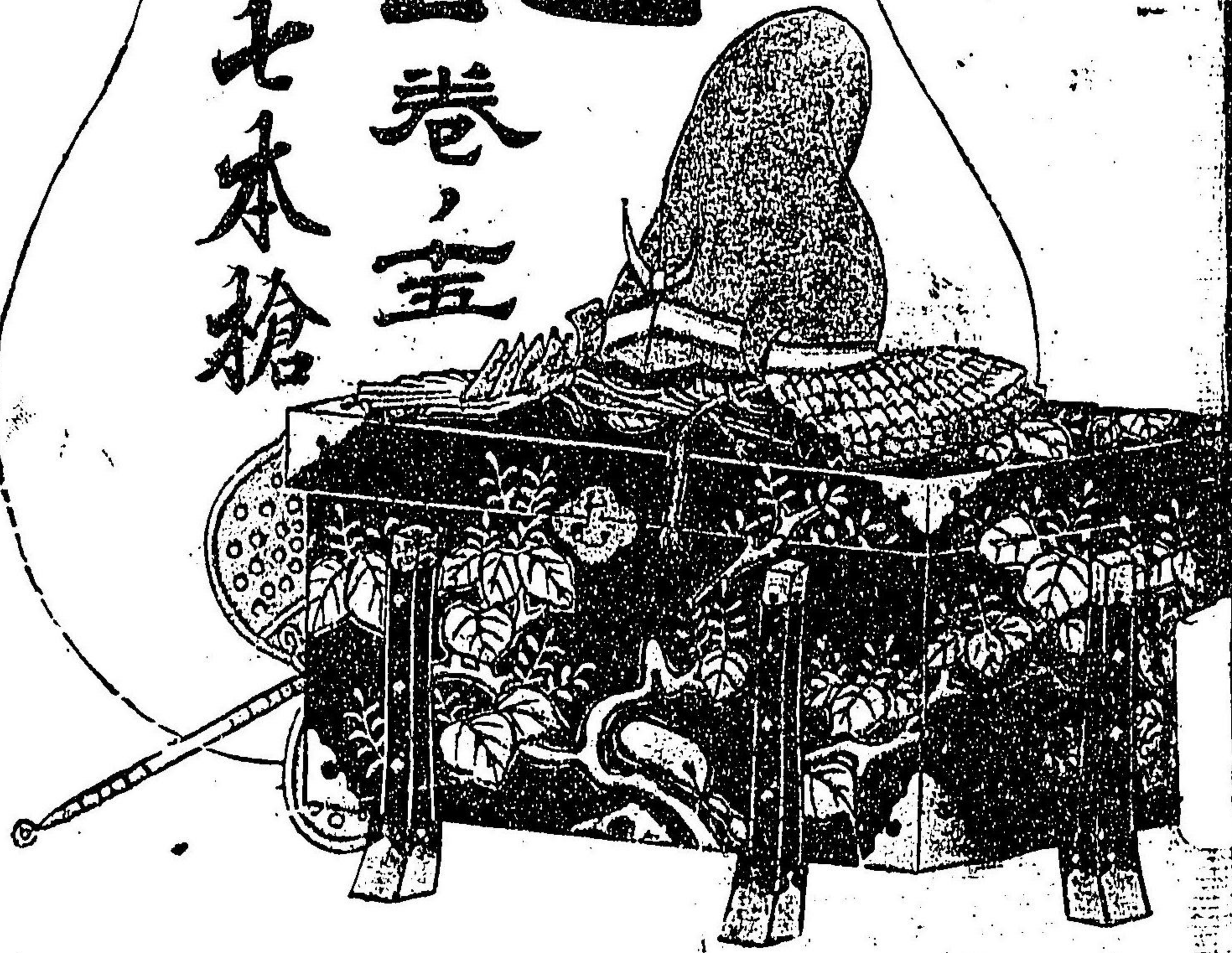


桃川燕林講演  
今村次郎速記

大器記  
卷之三

賤子嶽七本槍









太

閨

記

を掛け刃傷にも及ばんとしたる時に柴田修理之進勝家は是れを制し相焼香然るべしといふ時に双方是れに従ひ兩公既に相焼香に及ばんと致したる時に彼方の慢意の中に焼香暫らくといふ修理之進勝家勝何者あるか某がしが指圖して今や相焼香をなさんとする時に及び是を止めるは何者あるかといふ時に彼方の慢意一時に落ると遣は抑も如何に徐々ど立出たるは黒羅紗の直垂を着け菊の葉を透せる花の冠を戴だき菅崎緋の石の帯金造りの太刀を横たへ中啓を持つて殿然と夫へ現はれたるは此度の施さ羽柴筑前守從四位右近衛少將平朝臣秀吉左右には加藤虎之助、福島市松、片桐助作、平野權平、柏屋助右衛門、堀尾茂助、脇坂甚内、加藤孫六何れも熨斗目麻上下を着用して下には腹巻の用意をなし、殿重に支度を致し返りを拂つて扣にたり時に勝家大いに憤ほり大奮な揚げたる事にして 塵無風

大

閨

記

あり秀吉我々斯くの通り大紋烏帽子を着用して是れへ來りしに汝一人束帯にて出るといふは何事なるや察する處汝今日の大法會を械會として織田家の權威を森はんとするの心底からす次第に依つては其儘には捨置んに依つて左様心得ろと勢はい込んだる事にして修理之進勝家既に夫れへ進まんとする中にも佐久間玄蕃殿を初めとして瀧川一益等に於ては悉く憤ほりを現はしまして既に掴み掛らんとする様子此時秀吉に於ては持つたる中啓を上げるを合圖にド、インといふ一發の狼煙扱はと思ふ中に東山を初め御室、竹田、東來、四日塚、其の外醍醐山科、船岡、梅津、八ヶ瀬、大原、吉田、岩倉、山崎、島羽、伏見に至るまで一圖にウ、ワ、ツと云ふ閨の聲を發しましたる様子兎角する中に忽ち方十面へ人敷を配り何れも秀吉の旗馬印しを押し立て韓々ど扣ねたる其の有様、修理之進勝家を初め瀧川一益等一同



太

閣

記

アツと暫らくは言葉もなく其の様子を見て居ります中に秀吉  
 悠然として大勢に向ひ秀心を一同歴々事勿れ只今焼香を差  
 留めたるは如何なれば三法師君を差置き北畠神戸の輩らを第  
 一の焼香をさせんとおすか必や心得違ひを致すな、柴田勝家に  
 は何故あつて某がしを織田家を亂す奸賊なりとは申せしや聊  
 か忠義を尽すの志しを以つて今日大法會を致し奉つる只今秀  
 吉此の處に於て法會を營み其の上にて各々に申し聞せる事  
 ゐうあり其時に至り秀吉に野心ありと認むる時は官位剝奪し  
 て汝等一同にて此の秀吉を討ち取るべし必や手向ひは致さん  
 柴田瀧川北畠神戸の方々の爲めに此の秀吉如何なる目にも遇  
 ひ申さん只今是に於て述ぶるは秀吉の言葉に非ず三法師君の  
 仰せなり依つて一同其の心して承まはり我指圖に従かい焼香  
 あつて然るべし先づ夫までは必ず騒ぐ事勿れと大聲に呼はり

太

閣

記

ました、其の一言に柴田、瀧川を始め一同恐れ入つて扣ねたり此  
 時に頼宗訴大和尙、又經文を殿上げます其の間一同黙然とし  
 て居りましたが稍あつて秀吉其處へ進み出で御靈前へ三拜九  
 拜をなして懐中より取出したる祭文を高らかに讀み上げる其  
 文に曰く  
 時に天正十年今月今日南閣浮提大日本國帝都大徳寺に於  
 て総見院殿前右相亟贈一品大相國泰山劔寶大居士の尊禮  
 に對し敬つて白す  
 夫熱く光ふるに地水火風空の五行を借り一度人界に生を得  
 て何者か終り無らんや松栢も終りに朽て薪と變じ盛んある春  
 の花も嶺風是を散らす金花一日の榮えも人間一生の盛衰も  
 眠るなし電光石火の脆き夢も世の有様嗚呼悲哉天地陰陽禍



太閤記

蟻の如くに群る。徹夜柴筑前守秀吉去ル。永祿元年始めて止  
 へ。今正まで歴數廿五年に垂々とし匹夫より出で思澤身に  
 餘り辱むじけなくも一城の將たり殿命に依つて年々敵々各  
 に軍を出し向ふ處必や降也。是君の御武徳の余慶且又旗下の  
 勇士誠忠を思して命は君の爲に輕し名を家の爲めに重じ各  
 軍中に武勇を勵せしが故あり。就中中國に陣を對し毛利三家  
 を征伐せんと欲すと雖も、術盡き計畧極り。君家に援兵を乞  
 ふの刻み去る六月二日京郷の大變を聞いて如何せん。魂  
 天外に飛び身地に轉ふを知らず東西道を失ひ南北茫然たり  
 と雖も俱に天を頂敬るの仇同じ地を踏ざるの古語歎し無  
 く肺肝を碎き敵城高松をして水に溢し守將清水宗治に腹切  
 らせ謀つて和睦を勸め而して後告るに實を以つてし流石に毛  
 利の三將却つて怒りを辭ひし義を先にして恨みを後にす人

太閤記

福皆以て然る所以あり。君は東海尾陽の三郡に起り天下の大  
 道を興し給ひ時なる哉。應仁の亂後四海奸賊蜂の如くに起り  
 英雄鷹の如く群る。實に糸の亂れるが如く適々忠義の士有る  
 と雖も己れが勇微にして志しを遂る事能はせ只無念の光陰  
 を送る而已。時に君の武徳に依つて近國を切從ひ畿内を治め  
 東國を定め北陸は征し中興に戰を起し同域を平け。江に七分  
 を降す其の英名天下に輝き武威四海に溢れ上は一矢萬衆の  
 君の宸禁を安んじ奉つり下萬民塗炭の苦しみを救ふ。今三分  
 にして天下太平國家安穩ならしめんとす。嗚呼天に浮雲の憂  
 ひあり地に震動の悲しみあり。斗らも遊臣明智光秀須彌香  
 海の大地を忘却成し勿ゆる。若くも獄し奉つり無道にも京  
 都に旗を翻へし威を虎の如く振り偽つて仁義を飾り民を迷  
 はし。諸國の武士を非道に泥げんとす。惡は雲の如く集る。賊匪



太 閤 記

の裏に乘じて是れを打たず順を助け道を憎み信の味方と成  
りぬ是又君の御武徳天又臣が微忠を憐み賜ひ同月十三日城  
州山崎の合戦に打ち勝ち逆臣光秀を桑木に晒し君の怒りを泉  
下に休め奉つるに足れりとなすのみ依つて今月今日只今御  
難道の儀式を營なみ靈魂を慰め奉つる誠々として願首百拜  
す愚臣の誠忠納受し給はん事を伏て乞ふ羽柴筑前守從四位  
右近衛少將平秀吉恐惶謹言  
と高らかに讀み上げます其聲といふものは實に堂中に響き  
を正し聞き居りましたたが讀み終つて秀吉一同に向ひ秀三法  
師君御幼年にして其の御志ざしありと雖も其の言葉足らきし  
て意を解する能はぬ依つて三法師君に代つて秀吉汝等に申し  
聞せる事あり必らず秀吉の一言と聞く事勿れ先づ第一番に北

太 閤 記

島信雄是れへ進め秀吉は甚い勢はひだ北島信雄を呼捨てに致  
した元來此の人は柔弱の人ゆゑ少しく恐れをなし夫れへ進み  
出でますと秀如何に信雄只今其許に示す事餘の儀に非ず  
足下は織田家に於て最も大切なる人あり然るに某がし上意  
に依つて中國へ出陣を命じ其許に於ても同じく中國へ對して  
策馬を向けるやう故右大臣殿の命に依つて勢州坂下まで人  
數を出しおがら都の大變を聞いて大いに仰天おし備へを崩し  
何事も取敢へず其儀にして居城に歸られしは如何なる事を父  
兄の大事を聞かば其場に進み即日吊い合戦をも致すべき御身  
の上でありながら其の度を失ない只其まゝにして居城に歸り  
忍んで居られしに何れも御幼君に先立つて焼香せんと  
するや是れ御幼君を侮り奉つるの所存あるに依つて屹と謹  
言あつて然るべし信雄殿此の時に赤面をして暫らく頭を下げ



太

閻

記

て居り申する 秀次ぎに神戸三七郎信孝是れへ此の信孝といふ人は信雄と違つて性活潑でございませうからモウ其の一言を聞いて信雄が今秀吉の爲めに悉く殿談に及ばれたのを側に聞いて居た中からブル／＼顔えて居た然るに信孝是れへといふ一言を聞くとも目の色を變へたる事にして三七郎信孝 三扣へろ秀吉無禮あり如何なれば汝我れを指して呼捨てにあすぞ我苟しくも織田の公達たり其の連枝を指して呼捨てに致すといふは無禮であらう汝古しへを忘れしか秀吉カラ／＼と笑ひ秀云はれな信孝今日筑前守秀吉に向ひ言葉返すは違勅に似たり憚りながら十善萬乘の勅許を得て今日大法會の施主たるの秀吉なり然るに此の場に至つて其の是非善惡を聞かず只連枝なりとあつて我を侮り罵しめるの非一言ふう奇怪あり汝違勅の罪を知らざるかと高聲に呼はつたり違勅といふは此上

太

閻

記

もあの大罪あれば流石の神戸三七郎もハト云つて恐れ入り扣るたる様子時に秀吉言葉を重ね 秀其方事君の命に依つて申國征伐の大將をも仰せ附られ取巻を従はせ振州にうつて波紀州の地に人数を出し置の森をも攻められる處京都の大變を聞き忽ち其の地へ馳せ附るかと思へば大坂へ引取り池田勝入齋丹羽五郎左衛門と計り織田信澄を助け直機吊らい合戦あすべき處日向守光秀の武勇に恐れ敗日安閑とてし此の秀吉中國より尼ヶ崎まで上るを相待ち合戦に及びし際山崎表に於て齋藤の爲めに追はれ丹羽五郎左衛門の助けに依つて漸々幸き命を助かりしは何事あるぞ然れば此度も身を離しみ幼君を守護致すべき處左はなくして却つて幼君を押除け御家を取立て天下を押領せんと計り瀧川を語らひ柴田と申し合せ罪なき秀吉を害せんとして様々難題を申し掛け斯る不忠不義の行かい



大 閤 記

をなしながら亡君の御靈に向ひ奉つり何面目あつて人々に先  
立ち焼香せんとはあす右の罪あるは命に近づくと恐れぬ  
れども秀吉御連枝の儀を思ふがゆゑに一過の厚志を以つて未  
坐の麴香を命ずるなり過ちを願ひみるの心あらば此後とても幼  
君の御下知を待つて万事を行おうべしと説き破られて再び返す言  
愈し無念に堪えずと雖も理の當然に攻められて再び返す言  
業も無い其の儀に頭を下げ齒を嚙んで堪へて居りました秀吉  
再び座中を打眺がめ秀吉の末座に扣ねたる徳川三河守家  
康の名代酒井忠次是れへ出てよ酒井忠次聞いて居たがソレ此  
方へお鉢が廻つて来たぞと思ひなから夫へ進み出て忠主人  
家康の儀は先頭より病氣の爲め枕をも上げ飯はざる程の重体  
の有様にて心ならずも此度名代として某がしを法會の席に遣  
はされたり失禮の段は格別の御憐愍を以つて御許し玉はりた

大 閤 記

し秀ウシ家康は病氣に依つて此の度上京を致さねと云はる  
ゝか、ハテ口は自由聞けるもので徳川家康は信長公とは厚き  
交はりをして上落に及び堺の津に逗留ありしが明智の一亂を聞いて  
日頃の智勇あ似す俄かに臆病風に吹き捲られ間道を抜けて宇  
治の田原より伊賀越前に掛り野武士の爲めに其の跡を襲はれ穴  
山梅雪を見殺しになし辛くも二州へ逃げ歸りもは誠とに不義  
の舉動なり堺より近き大坂には神戸殿を初め丹羽池田中川の  
諸將も在陣の事なれば早速走せ附け相談の上合戦をもなし右  
大臣殿の厚恩に報ゆべきに萬事を捨て、引取れしは此の意を  
得ず左ばかりの事に心注がざる家康にもあらざるべし、利さへ  
合取の節も加勢一人も出さず敵の毛利すら加勢を差送るはさ  
なるに殊に家將評定の節にも名代を差越し其身は顔も出さず



太 閤 記

尙ほ又此の度の御法事にも名代を差出すの段旁々以つて不非  
のなり是れ發君の身を窺かい天下を奪はんの下心なるや家康  
上落あらば乾と申すべき事なれども病氣どおらば是非に及ば  
ず使者の其方に兎角申すも無益の至りなれば立歸り此の趣む  
き申し候いと酒々々やりめられた是れも家康が悪い其の時  
には何も云はなかつたが流石は秀吉此の場に於て遠慮なく述  
べ立つた酒井忠次暫らく頭を下げて居りましたが忠恐れ入  
つたる御一言立歸り主人家康に對し申し告げるでござらう  
秀次ぎに柴田勝家瀧川一益是へ出でよ相尋ねべき仔細あり此  
時柴田勝家は烈火の如くに怒り勝無禮なり秀吉汝れを取  
むき忠臣振り君の厚恩を報ぜん爲め御法事取行ないたしど  
我が方へ使ひを送り我も汝が奸計とは知らぬ妙と存せしど  
禁中を取つくり勅命なりと偽はり勅威を借りて己が威勢を

太 閤 記

振はんとなす段不届至極なり主君たる両御連枝方を耻かしめ  
猶ほ我々をも一言の許に耻かしめんとするや養君を名として  
織田の天下を奪はんとの企みならん諸將を歸伏させん爲め表  
てに忠義の色を顯はし内心に悪企み企だてると雖ども此の勝  
家兩眼黒き中はヤワカ汝の儘に致さすべき無禮をや云はん慮  
外とや云ん又汝に呼捨てにされる處の勝家に非地汝は身の程  
を知らざるか尾張國中村に生れたる士民ならや斯く申する  
勝家が取立を以つて今日の位置を占むるに至りし恩義をも忘  
れ我れに向つて勝家とは何事なるぞ秀賦れ勝家此方は即ち  
土民より出で未だ木下藤吉の昔しより上の御厚恩を蒙むりし  
事は今汝が申すまでもない宜く祭文の中に述べたり殊に汝  
等兩人我々を害せんと種々に計ると雖も天道忠臣の眞を憐れ  
み給ひて危難を救ひ給ふ處ろ猶ほ疾妬偏執の心より我れを憎



太 閤 記

くみ此の我意に謀り其の身の不忠不儀なる事を願ひみず只大  
老古參を鼻に掛け、幻君を蕨がしろになし終ひに天下を押領せ  
んと計るは是れ大逆無道の心底なり即ち勝家は京都に大變あ  
りし其節に若州まで上り居ながら都へ駆せ上り亡君の吊らひ  
戦争をなし逆賊光秀を討つべきの所存もなく却つて本國へ逃  
歸りしは明智の武勇を恐れしか但し己れが根を堅うして主家  
を奪はんの存念なりしが然るに其の身の不忠をも耻ぢせ中國  
より引返し山崎の一戦に光秀を滅ぼし泉下の御無念を晴し奉  
つりし秀吉を失はんと企て而已ならず足腰を損ませしは  
無道と云はんか無法と云はんか云ひ分あらば返答如何に不忠  
不義の大腰抜け柴田瀧川何面目あつて亡君の尊靈に對し焼香  
をなすぞと大音に罵しつたり流石の勝家も一言の返答なく齒  
嚙をなしてチリッとい進み既に差添の柄に手を掛けたる

太 閤 記

様子瀧川一益袖を扣は二、元老御立腹は尤ともおれども折所  
が悪い此處で刀の鞘をも排うと夫れを幸はいに追出てやうと  
いふ心底殊に我々共の同勢は日野岡より入る事を許さず彼の  
同勢は洛中洛外に漏々たれば到底如何とも致し方なし先づ今  
日は無念を忍び給ふべしと制せられて勝家も其の理に服し一  
座を明け渡つて見込ました此時秀吉、秀ヤア、徳善院焼香順  
席を讀み上げ而して一々焼香をさして然るべし「ハッ」と云つて  
前田徳善院玄日法印其の處へ罷り出で紫の服紗に包んだる焼  
香席順を認めたるものを夫れへ出ししました一箇の者扱は筑前  
守秀吉第一番の焼香といふに相違あ心得中には柴田瀧川  
の人人に於ては若し第一に秀吉焼香をするに於ては其時こう  
捨置き一刀の許に切捨られんと片唾を呑んで扣はたり此の時  
前田徳善院右の席順書を聞き大音を揚げたる事にして、徳今



太

閤

記

日第一番の焼香は山崎職かいに大功少ながらざるに依つて攝  
 州茨木の城主中川瀬兵衛清秀と讀み上げた、はッど一同驚ろい  
 た、徳第二番の焼香は攝州高槻の城主高山左近太夫房第三  
 番は同國花熊の城主池田信輝入道勝入齋第四番は江州佐和山  
 の城主丹羽五郎左衛門第五番は濃州岐阜の城主神戸三七郎信  
 孝(神戸戸員は職争に出たといふ康で第五番に焼香をされた)六番  
 は和州高取の城主堀久太郎秀政七番は攝州山下の城主塩川信  
 者守安高八番は若州佐柿の城主峰谷出羽守秀國九番は攝州矢  
 田の城主安部仁右衛門友時十番は播州三木の城主黒田勘解由  
 孝高同じく吉兵衛長政十一番は尾州清洲の城主北昌中將信雄  
 公十二番は越前北の庄の城主柴田修理之進勝家十三番は勢州  
 桑名の城主瀧川左近將監一益十四番は丹波田邊の城主細川藤  
 孝入道幽齋同じく與一郎忠與十五番は信州川中島の城主森武

太

閤

記

藏守長員十六番は江州勢田の城主山岡對馬守重久第十七番は  
 大和國郡山の城主筒井友直入道順慶十八番は越前府中の城主  
 前田又左衛門利家十九番は越中富山の城主佐々陸與守成正二  
 十番は越前大野の城主金森五郎八、二十一番は加州金澤の城主  
 佐久間玄蕃盛政二十二番は濃州大垣の城主氏家内膳正二十三  
 番は越中末森の城主不破彦三、二十四番は濃州加納の城主遠山  
 遠江守二十五番は伯耆羽衣の城主南條伯耆守二十六番は備中  
 廣瀬の城主小鴨中務少輔二十七番は遠三兩城の旗頭徳川三河  
 守家康の名代酒井左衛門尉忠次二十八番は越後國春日山の城  
 主上杉景勝の名代直江山城守兼繼二十九番は毛利輝元の名代  
 堀田越中守三十番は吉川駿河守名代穴戸右京三十一番は小早  
 川隆景名代井上五郎兵衛三十二番は浮田秀家の名代花房志摩  
 守三十三番は真田昌幸名代真田與兵衛幸村其外陪臣には淺野



彌兵衛、蜂須賀、彦右衛門、杉原七郎、右衛門、加藤虎之助、福島市松、片桐助作、平野權平、堀尾茂助、木村小隼人、前野庄右衛門、加藤孫六、粕屋助右衛門、大谷平馬等一々其の姓名を讀に上げました

第二席

元老、柴田修理進、勝家も關東の管領、澁川一益も殘念に心得しが、何分筑前守秀吉が正理を履んで此度の大法會を行なひ殊に勅命を以て何事も運べるがゆゑに兩人は如何とも詮なく只針の筈に座するやうな心持ちを致して居ります内に筑前守秀吉勝家に向ひて秀如何に勝家改ためて申す事あり先頃斯申する秀吉へ對して導引を望みし事あり苟も某かしは中國の探題、播州、姫路の城主、從四位下、右近衛少將たり其官職のある者に對し導引を望むは此上もなき無禮なり位ぬは天子の政權にして此度くしに非き右近衛少將に對して導引を望みし程の事ゆゑ此度

太 閤 記

太

は分けて遠路を來り今日は尙更此所へ至つて先刻より種々の心勞にて定めて疲れたるおらん依て某がし申付け置たる按摩を是へ招ぎ療治致して遣はすゆゑ左様心得たしと云はれて勝家大いに驚ろき遣は如何なる按摩が來るかど心得たる時に秀吉大音揚げたる事にして秀用意なしたる按摩ども一同是へ參れと云ふ下知に應じてアロ、夫へ現はれ出でたるは加藤虎之助、福島市松、片桐助作、石田佐吉、平野權平、粕谷助右衛門、脇坂武内加藤孫六等何れも具足にて身を固めたる事にして力足を踏んで夫へ現はれたり取分けて加藤清正は大音揚げ、清如何に元老に申し入れる今日主人に成替つて我々ども大勢にて尊公、身体の疲れを揉ほとして進せやういざ夫へ療玉へと云ふと福島正則、片桐助作等痲々立つたる寂然いざ療治を致さうと修理之進、勝家の肩に手を掛んとする様子、勝家驚ろいてふんな者

太 閤 記



大 閤 記

に揉れて堪るものかと思ひ 勝「ヤア」 不禮なり秀吉某がし  
 へ對し何ゆゑあつて斯様なる振舞を致すと勝家は身体少し  
 も疲れ居らんに依つて導引を致すに及ばん」と云ふを一同の者大  
 口明いて打笑ひながら今日按摩の用事なしとは何事なるぞ主  
 人にさへも療治を申し付けたる位にすれば我々ども主人に代  
 つて今日は療治致して進せる肩腰の骨を残らず揉挫いて御覽  
 に入れる首も抜けて療治を致さう……「煙管ではあるまいし首を  
 扱て療治をされて堪るものか一同の者に取固れましたゆゑ流  
 石の勝家大いに恐れ居ります内に瀧川一益にも向い如何に  
 關東の管領瀧川一益殿へ申し入れる尊公は按摩の御用はござ  
 らんか」一益は是は大變だと思ひ「一」どう致して私は元來按摩  
 は大嫌ひでせうぞ許して玉はれ」と云ふ内に追々夫へ参りさま  
 く の悪口をして兩人を嘲弄する事夥だし瀧川柴田の二人は、

大 閤 記

一ツ處に固まつて少さうなつて居る秀吉此様子を見て居りま  
 したが秀「コレ」 無禮をしてはならん其兩公は織田家に取  
 て此上もあく力ある御人あり導引揉療治を望まんとあらば強  
 てお勤め申すに及ばん差扣へて宜しからうと秀吉の一言は鶴  
 の一聲一同周圍を取巻たる荒小姓の人々腕を擦りあがらば  
 殘念あり今日みうは充分に療治致さうと心得しに俄かに按摩  
 が嫌いにあらんは願病千萬斯様な臆病者は我々どもの療治に  
 は逆も耐られぬとい口々に笑ひ馬しりましたる事にして其所  
 を退散する其内に鉦も鳴りて最早御法事も滞るはりあく相濟た  
 れば一同此所を退散に及ぶ柴田瀧川の兩人は今日はモ一丸で  
 瀧鼠同様の有様に這ふく の体にて此所を退散致し何れも  
 旅館へ立歸りました秀吉に於ては其翌日にあると都の人民へ  
 對して故右大臣公の遺品と稱し米錢等を興へどうも宮に行届



太 閤 記

いたる致し方でございませう然れば寄ると障ると筑前守秀吉を  
 褒めざる者なく此度の法事に於ては秀吉施主と相成つて居り  
 まするを諸家ともに褒め賞して居る瀧川一益に於ては旅館へ  
 立歸つて暫らくの間隙を扱ぬき考へて居たが「ア、どうも  
 秀吉と云ふ者は剛い者だ先づ天下の様子を熟く考へたに  
 秀吉は此儘にして事を済すものでかい必ずや大いなる企畫  
 のあるに相違ないと思ひ四邊りの様子を見て居りましたが固  
 より奸智に長けて居ります瀧川一益此時に柴田勝家を煽動  
 して筑前守秀吉と戦かはせ其虚に乗て三七郎信孝に天下を握  
 らせ己れが其後見をかさんと云ふ考へを起しました全体勝  
 家は元老の任に當り居りおがら有名無實にして何の行なう所  
 もない謂はゞ柴山子同様な有機又北畠信雄に於ては性腿病に  
 して愚將なり斯様な者は天下を握る事は出来ん神戸信孝に

太 閤 記

於ては天賦の勇ありと雖も短氣にして是とてもどうも長く保つ  
 歸にも往くまいが差當り神戸に對し天下を握らせるが當然で  
 ある夫には勝家をモッ少し怒らせおければ往げまいと胸中に  
 策畧がありまする瀧川一益翌日になると勝家の旅館へ参つた  
 スルとモッ勝家に於ては火のやうにあつて怒つて居る何で怒  
 つて居るかど云ふに前日法會の席に於て甚はだしき耻辱を受  
 け旅館に歸つて見れば萬端筑前守の差圖に依ります所ゆゑ  
 如何にも夫が残念で堪らない少しも早く此所を引揚ひたいと  
 心得家來を呼んで勝早々に此所を引揚うから相當の所を見  
 立て参るやう致せどうか秀吉の手を放れて旅館をも定めた  
 ど命じましたから家來の者早々に八方を奔走して旅館を尋ね  
 ましたがどうしてもない何れも立歸りまして家來恐れながら  
 申し上げますどうも憎い奴は秀吉で隅から隅まで充分に届い



太 閤 記

で居りまするゆゑ旅館などは取分けて一ぱいで中々三十人の  
事を置いて三人の人も遣入る事は出来ません勝家は是を聞いて愈  
々怒り勝何だ三人の者の泊る所もあいと金銀を以て事をす  
るに旅館がないと云ふ事はあるまい汝等が探し方が行き届か  
るのであらう此上は勝家自身に参り其番場を極るであらうと  
勝家と云ふ人も恐ろしい強情だから七八名の家來を連れ尤と  
も忍びでございまして京都の落中落外を歩き己れの旅館を定  
めやうと心得たが在ればとて幾ら探してもない動々もすれば  
筑前守様からお許しおなればとて貸し申す譯にあらんと云ふ  
所がある夫だから愈々怒りを増していろくに考がへました  
が不圖心付たと思へ勝さうく二條通りの本能寺へ参るで  
あらう寺の事であるから中々廣い殊に恐れながら右大臣御生  
害の場所ゆゑ回向旁々其所へ参るであらう五日か十日の事で

太 閤 記

あるから少し不自由は忍ぶべしと勝家家來を連れて来て見る  
と本能寺も筑前守の同勢が七八十人遁入て居ります何れも桐  
の紋付たる半被を着用して中には具足を付け大小を殿めしく  
帯して居る者なども居る勝家はさう云ふ者に目を掛かす  
高院へ通り番僧を招ぎましたから番僧は夫へ來つて見ると立  
派の人物ゆゑ夫へ手を突つて番何御用でございます勝其方  
は常山の番僧か實は忍びて罷り越したか予は北國七州の藩鎮  
柴田修理之進勝家である番へエ勝實は此度大法會に就  
て都へ登り旅館に罷り在つたる所少々都合に依つて旅宿を改た  
め雷山へ罷り越す事ゆゑ左様心得住職へ此段を申し告げるや  
う致せ當本能寺は故右大臣御生害の場所なれば回向旁々雷山  
に逗留を致す尤とも長い事はない七日か十日の間おれば左様  
心得て手當てを致して呉れ人数は三十人ばかりだ番御尤と



もの仰せをどぞいませば一應伺がひました上にて御挨拶を仕  
まつりませす暫し御扣へ下さいまし 勝ア、住職へ尋ねるか  
當イエ住職は如何でも宜しうございませすが豫て羽柴筑前守秀  
吉公よりして御達しにあつて居ります 勝ナニ穢面の冠者秀  
吉に尋ねるか 番左様で今日禁裡守護職にして何事も羽柴様  
に伺ひい済の上でなければ承知致す事にありません假令一人  
ありと雖も當本能寺へ無礙にお泊め申す譯になりません 勝  
ウム筑前守は何だイヤ秀吉は何だ彼は其往昔木下藤吉郎と  
云ふ足輕だ故右大臣家の手許に奉公を致し其砌り斯申する  
勝家おどお口を添へて御奉公さした位ぬの者だ然れば某がし  
から見れば家來同様お者に其家來に照會をしなければ寺を貸  
事があらんと云ふ法があるか 番夫はさう云う御内情がある  
か存じませせんが今日は京都所司代禁裡守護職でございまして

太 閤 記

都の者は皆神の如くに敬まつて居る筑前守秀吉公の事ゆゑ一  
應伺がひを立てませんければお氣の毒様ながらお貸申す譯に  
なりません 勝コレ 扣へる秀吉の差圖にて當寺へ参る位  
ぬおれば只今の旅館に居ても同じ事だモ一宜い立歸る 番お  
歸りに相成れば夫に越した事はございません何事も秀吉公の  
お差圖次第でございませすから強て本能寺を旅館にお定めに相  
成ると云ふ思召しなれば貴郎様から筑前寺秀吉様のお袖に絶  
つて只管にお願ひおすつたら宜しうございませう 勝黙れ  
秀吉の袖に絶つて只管に頼めどは怪しからん奴だ」と頭から畑  
を出して怒つて直ぐに家來を連れて本能寺を立出でたがモ一  
都の地に一日も居るのは忌だ一旦旅館へ立歸り旅立ちの用意  
を致して考がへて居る所へ龍川一益公がお出でにかりました  
と云ふ知らせ一益は無二の朋友であるから早速に面會をした

太 閤 記



太 閤 記

勝どらも瀧川昨日の法會と云ひ今日の有様餘りどらも不埒を  
 致し方て夫ばかりではない只今斯様く云々拙者は夜前まで  
 は少しも眠らん位ぬた百事秀吉の差圖を聞かければ事か出来  
 ん此都の内は独の下知を聞なければならんと云ふのは實に殘  
 念で堪らん依て今日此所を出立しやうと心得る 二夫に就て  
 少々今日一益申し入れたい事があつて參つた先づ 暫らく  
 怒りを止めて某がしが密々申し入れる事を聞玉へ 勝ハ、ア  
 密々申し入れる事があるとおれば承たまはらう餘人とは違ひ  
 竹公の仰せ勝家はモウ覺悟をした 二覺悟をしたと云ふのは  
 人数を卒て歸國をするのか 勝イヤ歸國はせん一度是より日  
 野岡へ廻むき手回りの同勢を卒て再たび此都へ乗込み秀吉を  
 對手に充分に合戦するの心得だ 二夫は往かん大方左様な事  
 もあらずと心得て一益罷り越したが失禮ながら左様しては自

太 閤 記

分が罪を造るやうなものだ假にも勅命として三十人を限り家  
 來を引人れる事はならんと云ふ觸に對し濫りに人数を引入れ  
 る時は秀吉は恐れないが違勅と云ふ恐ろしい罪がある織田家  
 の元老たる者が違勅たるの罪を受たとあつては世間の聞へも  
 如何と考がへる一益も筑前守秀吉を對手にして事をするの  
 同意であるが中々彼殿重にして三十人や五十人の同勢を以て  
 迎も彼を倒す事は出来まいと云ふし兵を卒て乗込なければ  
 ちらんがさする時には違勅の罪だ然らば迎も今日都に於て彼  
 と争いを遂げる事に往かない 勝是はどらした宜からう  
 二夫に就て御相談申したい事がある先づ某がしの考がへでは  
 一度歸國をしたら宜からう某がしも歸國をする其内に用意を  
 して事を起すやうにしたら宜からう 勝成程ッテ見れば勝家  
 一度兵を纏めて北國北の庄へ引返し二万でも三万でも同勢を



太 閤 記

卒て都へ乗込んで参るのか 二さうだけれども中々迂潤に事は出来ん何にしる秀吉は人望がある今日の有様を見れば尊公などは織田家の元老にして此上もない重い身分であるか全然其行なう所百事秀吉の差圖を受け全然猿の下郎何様だ猿の奉公人見たやうだ 勝モウ宜い く どうせ己は猿の下郎だ 二さう怒んなさるな先づ彼と暇かいをあすには共前に充分見抜て置なければあらん事がある夫と云うのは秀吉に同意をして居る大名等内々不平を抱いて居る大名がある夫等を見抜て此方の味方に引入れなければあらんさうするには拙者から申しては往かんが尊公が元老の任を以て此度織田家再興の事に就て御一統に評議を致したい事があるからどうぞ来つて充分に意見を陳べて呉れろと云ふ回状を池田勝入齊、丹羽五郎左衛門を始め其他の者へ差向けるのだソコデー同集まつた所で拙者を

太

が事を述べて彼等の意見を尋ね内々敵と味方を見極くと云ふ策はさうだ 勝夫は宜からう 二さうした上で事を掲げた方が宜からうと云ふので愈々兩人相談の上茲に大名方へ回文を廻して柴田の旅籠へ面々を招ぎます茲に池田勝入齊一語を吐いて人々の生體を寒からしむるの一條

第三席

閤

瀧川一益は中間に在て秀吉も勝家に軍さをさして其内に自分が神戸三七郎信孝を以て天下を握らせ三法師の君を退ぞけやうと云ふ工にありませう人でさればにや勝家の如きものは瀧川一益の目から見れば有て無いやうな者で充分に其謀事に籍めたるものと見へ勝家は俄かに熊大名に宛て、廻状を廻はしましたから之に依て集まりましたるもの、丹羽五郎左衛門池田勝入齊中川瀬兵衛、高山右近、細川玄馬、蜂谷助右衛門、堀久太郎、前田

記



太

閑

記

又左衛門、不破彦成、金森入道、佐々内藏之助等を始めとして追々  
 出席に及ぶ一益に於ては、當日勝家に代りまして亭主役をいた  
 す面々出席して見れば、肝腎の柴田勝家が見へないから人を招  
 て置て主人が見へない云ふは不都合であるど名々必得て席  
 に付くと瀧川一益夫へ出で、二御一統へ由し上げます今日  
 は元老柴田勝家殿よりして各々を招き申したる處夜前より  
 勝家殿俄かに病ひの爲めに枕も上らば此處に出でる事叶はせ  
 依つて此一益に對し代理いだすべき旨を申し渡されたに依つて某  
 しより各々に御相談を致す其相談をいたす点と云ふは外では  
 ない過日柴野大徳寺に於て故右大臣公御法會の席上に於て秀  
 吉暴逆無人の計らひ誠に以て捨置き難きふとあれども勅命と  
 云ふ言葉あるに依つて免し置くと雖も何事も彼控いまゝに行  
 ひ人有て無きが如く御幼君は未だ三才にして東西の方角も御

太

閑

記

存知なき御方されば百事鏡前守の心より出で、我々を蔑しろ  
 にいたす此上からは如何なる企たてをなし遂には織田家を横  
 領せんの心あるも知れず依つて此場に評議を爲し秀吉に對する  
 所置を定めたく之と云ふも故右大臣様御恩澤を思ひ又御幼君  
 三法師君の御爲めにさす處なれば各々の思し召しを承知いた  
 し度く第一に五郎左衛門長秀殿に於ては此頃に至り筑前守と  
 其交際を厚うするの由を承知いたす尊公の御存慮も承まはり  
 たく存せざる五郎左衛門之を聞て兩眼を閉ぢて黙したり、二善  
 悪共に述べられたは何も某しが五郎左衛門殿を詰る次第では  
 ないか織田家を思ふ志しの厚きが故でござる、此時池田勝入齋  
 信輝坊主頭を振立て、進出で、進瀧川一益殿へ申し入れる柴  
 田勝家の代理として今日お述べなされる處では筑前守秀吉は  
 暴意を募る依つて如何いたしたものであると云ふ其如何いたし



太

閑

記

たものであると云ふのは秀吉を討つと云ふ思し召しと見ゆる  
 某しは筑前守へ同意をいたして居る事ゆゑ秀吉を討つと云ふ  
 相談されば拙者一人は御免を蒙ります今日勝家之へ見知ら  
 れるならば斯く申す勝入齋改めて勝家へ對して申し入れん  
 と存ぜし事もあるが病氣とあれば是非に及ばん畢竟織田家の  
 元老として執權と云ふ大任を帯びて居りながら萬事行届かざ  
 るが故に秀吉先んじて之をいたす然るに己れの足らざるを省  
 みず秀吉を恨み動もすれば之と戦を争はんとする勝家の心よ  
 り怪しむべき事なり左様なる者に三法師君の後見を任せ置く  
 は實に覺束おい事と存せる既に先頭は己れ後見の任にありま  
 がら三法師君を差置て神戸北島の兩君に相燒香を爲すの沙汰  
 に及ぶが如きは以ての外かある事神戸北島は何等の功あつて  
 第一に燒香を爲すか勝家の爲す事は徹頭徹尾勝入齋の心に叶

太

閑

記

はざる處元より某しは秀吉と入懇にいたすゆゑ若し又秀吉を  
 討んと云ふの次第あれば斯く申す勝入齋相手に相成る某し  
 は右大臣家の御恩澤を思へばよそ秀吉と交り結びて居る秀  
 吉は眞に織田家を助けんとする心あるものありと成猛高にお  
 つて述べたる時に金藤五郎入道み出で、金池田殿の御せら  
 る、處御尤もではあるが畢竟筑前守秀吉天下の政事を司とる  
 と云ふは俗に云ふ物を行り過ぎると云ふもの本來あれば自  
 分ていたすべき事も元老柴田慶へ譲られて然るべしだ然るに  
 元老に先立て己れに事をするに云ふは筑前守の甚だ宜しから  
 ざる處と云ひも終らざる内に中川瀬兵衛瀬八が問敷い此場  
 に至つて何を愚圖く議論がましき事を申される所様お事と  
 承知すれば中川瀬兵衛參るではあかつたが織田家に就て一大  
 事あるに依て密々集會をいたしたいと云ふから罷り越した然



太 閤 記

るに最前から聞て居れば秀吉が斯うの勝家が斯うのと云ふが  
各々方々も織田家の祿を食んで居ると云ふものならば共同一致  
して織田家を助け幼君を養ひ奉まつるべきではあいが全體  
元老勝家の所置が悪い秀吉の何の点が悪いと云ふ處が不都  
合だと言ふ点があれば充分に夫を責めて成程悪い事あれば秀  
吉も夫を改めるであらう若し改めざる其時にあつて差支  
へかしく斯く申する瀬兵衛清秀は表裏反覆と云ふ事がある  
だ夫を勝に於て秀吉に斯う云ふ事があるのさう云ふ事がある  
の云ふは實に勇士の爲すべき事でない元より短氣の瀬兵衛  
清秀少しも遠慮なく滔々として述立てた此時に不破彦三原喜四郎  
の二人は聲を揃へ瀬兵衛助もすれば秀吉へ對して力を添へる  
秀吉は正理を踏むものなりと云ふが拙者の考へではさうであ  
い御幼君を瞞者して織田家の天下を握らんとする下心に相違

太 閤 記

なし秀吉を助けんとしても駄目だ」とモオ斯うなると議論が二  
ツに分れ名々大聲を發して其意見を述べ立てる片腕に扣へて  
居りましたる塩川伯耆守 伯先づ「暫らく今日此場に於て  
争ひをいたした處が少しも益はあかぬ某の考へにては柴田勝  
家殿も罪なきもの云ひ難い只今勝入齋殿の云はれる通り此  
大任を負ひながら事を忽がせにするが故に秀吉之を見兼ねて  
進んでいたしたものだ夫を残念に心得争ひの種を播くと云ふ  
は元老にも似合はざる事某し之までの事を考ふるに秀吉右大  
臣家に事へ奉まつり馬の口取りより経身り今日は播州姫路の  
城主中國に探題とありしは實にどうも恐入つたる者柴田勝家  
殿が此秀吉の處置に對し不満を抱くなど、は甚だしき過まり  
にて全休元老の職に在れば右大臣家京都二條本能寺に於て御  
生害の折柄第一に乗込んで其吊ひ合戦をいたすべきに一旦



太

閑

記

都へ立歸りながら秀吉が惣大将に任せられたを見て直ちに北  
 國に立歸るは實に無情のいたし方之をして織田家を思ふ忠臣  
 ありと云ふべきか其勢ひを見て瀧川一益は二誠二誠に今日の  
 有様を見れば元老勝家と筑前守秀吉との間不利あるを以て之  
 を取廻めるが第一と心得るを一益の言葉を持たず中川瀬兵衛  
 中中和談などはするに及ばん若し勝家兵を出さば斯く申する  
 中川瀬兵衛第一番に夫へ進み出で柴田の白髪首を拙者が引  
 抜いて御覽に入れ何のアンナ首は雑作もないと瀬兵衛大聲  
 を舉げて罵しる其處で瀧川一益は段々様子を見るとどうも秀  
 吉の爲めに身命を抛たうと云ふ者の方が多し是では逆も兵を  
 起した處か勝家の勝利を得る氣支へはふいとモウ見込みを附  
 けましたから一免に角今日一免は元老勝家も欠席いたせし事故  
 に猶此上は元老の病氣全快を待て更らに各々を招き其時に各

太

閑

記

々の御意見を承たまはり度く何卒今一回御出席の儀を願う今  
 日は之にて退參をいたすと云ふ聲に一同の人々己に退參をし  
 やうと云ふ處へ若侍罷り起して若若只今郡山の大將筒井順慶  
 殿ふ入りにありました一一オ一さうか御一統暫らく今筒井  
 順慶殿見ゆられた趣むき何か又順慶は順慶だけの策もござる  
 うから暫らく見合せに預かりたいと之で再び席に着く和  
 國郡山の城主筒井伊賀守順慶之れは矢張柴田より回状を廻し  
 たので其時に順慶と云ふ人は自分で之を所置する事が出来  
 いから使を歸へして置て跡で順左近松倉右近を招て之は筒井  
 の兩家老右近左近と云ふ人があるから順慶の馬鹿が世に願は  
 れない位順極其方共へ申し入れるが此度柴田勝家より斯様  
 なる回文が廻つて参つたがどうしたものであらうスルと島左  
 近は松倉右近の顔を見ると右近も亦左近の顔を見る互いにク



太 左之は一  
 大 事でありませぬ聊さかの事を思し召すと大いに遊います此勝  
 家の招きに應じて夫へ御出席にならなければ二心ありと思は  
 れますさればと云つて夫へお出でになつた事が筑前守の耳に  
 聞えろと秀吉の爲めに二心ありと思はれます 願夫だから予  
 は困る何したら宜い 左之はあ出あさい往て大方名々の意見  
 を述べるに相違あいか斯く申する左近の心底では之は柴田勝  
 家よりいたしたる回文ではありませぬ瀧川一益の策畧に相違  
 ありと存じます 願ウソごう云ふ譯だ 左柴田と羽柴の間が  
 不和にして何か彼の企圖のありませぬ事に相違ありませんさ  
 れは今日集りたる人々の志しを確めて之は誰に附く彼は誰に  
 附くと云ふ事を其場に於て定め様と云ふ全く瀧川一益の意見  
 に出でましたるものさうして見れば往ても悪い往かんでも悪

太 左之は一  
 大 事でありませぬ聊さかの事を思し召すと大いに遊います此勝  
 家の招きに應じて夫へ御出席にならなければ二心ありと思は  
 れますさればと云つて夫へお出でになつた事が筑前守の耳に  
 聞えろと秀吉の爲めに二心ありと思はれます 願夫だから予  
 は困る何したら宜い 左之はあ出あさい往て大方名々の意見  
 を述べるに相違あいか斯く申する左近の心底では之は柴田勝  
 家よりいたしたる回文ではありませぬ瀧川一益の策畧に相違  
 ありと存じます 願ウソごう云ふ譯だ 左柴田と羽柴の間が  
 不和にして何か彼の企圖のありませぬ事に相違ありませんさ  
 れは今日集りたる人々の志しを確めて之は誰に附く彼は誰に  
 附くと云ふ事を其場に於て定め様と云ふ全く瀧川一益の意見  
 に出でましたるものさうして見れば往ても悪い往かんでも悪



太

閣

記

愼にも尤も其点から申せば甚だ筑前守と云ふ者は捨て置かれん者だ併し又都を守護して今日十善の君の守護職を申し付けられ一人あして大法會を報行はんと勅許を得て此度忠を全うしたは實に秀吉に才智譽むべき者であるけれども又柴田勝家殿は北國七州の藩鎮殊に又瀧川殿は勢州桑名上州前橋兩城兼帶關東の管領さうして實に天晴れの人だ併し又之が其所謂就中、勿論、到底、現場、其…… ○何だエ少しも分らねへ 順其處で其さうも所謂、故に勿論即ち「イヤさうも一益も驚いた各々はッス」 笑つて居る筒井順慶は一生懸命頭から烟を出してやつて居た 順夫が即ち其勿論、所謂「と云ひ始めると中川瀬兵衛 瀬モウ分つたさうも相變らぬ貴公は日和見一点張だ如何して好いとも分らす何だか斯く申する瀬兵衛には一向分らない全體さうしたのだ寧ろ到底現場では少とも分らん 順

太

閣

記

夫か其所開故ども 瀧モウ分つた「一益胸中にハ、ア之は島左近から云付かて来たんだな斯う云ふ事を何時まで聞て居た處かトンと其意を知る譯には往かんと思ひ 一「御一統へ申し入れる只今申上る通り今日は解散をして改めて其集會をいたすべきに依つて其時は柴田勝家殿の前に於て名々の御意見を書面に認められでる出しを願ひます委細承知いたしたと云ふ中にも筒井順慶 順夫が宜しうござる某しなごは敢て右に付き左りに附し次第ではあゝ其處が夫れ所謂、到底、就中、勿論、寧ろ現場場 ○「モウ澤山だ」と途々筒井順慶は寧ろ到底故はで戻つて了つた一同に於ても名々其旅館へ立歸りましたが瀧川一益に於ては改めて柴田勝家の處へ參つて扱今日之々斯う云ふ譯でござうも其集まる人々の様子を見るも七分通りは筑前守秀吉に加担をして居る様子此工合では事を計る譯に往かんから一旦



太

閑

記

歸國をして秀吉が三法師君へ對して不都合な事があるを問者  
 を以て探らせ其時に於夫を云ひ立てに軍事を起すとして一旦  
 此處を歸國するより外に仕方がない併し無礙に立歸へると云  
 ふは又彼が爲めに突込まれる故三法師君の御前へ出でゝ暇  
 乞をいたし立歸らんと其處で双方共に三木木に在する三法師  
 君の旅館へ罷り出でゝ暇乞をして遂に兩名圖表へ歸國いたす  
 事におりましたたが固より奸智に長けたる瀧川一益謀事を施ら  
 して遂に柴田羽柴の間に事を起すの端緒を開くの一條

第四席

柴田勝家といふ人は只人の功を嫉め己れの我意に慕りまする  
 人で取別けて秀吉とは悉くの不仲でございませす同じ事でも  
 瀧川一益といふ人は自分には好い子になつて其の實人を倒して  
 己れが徳を取らうとする何方が悪ひと云へば此の一益の方が

太

閑

記

遙かに人間が悪ひ三法師君の假御所へ兩人罷り出でゝ暇乞ひ  
 をいたし片方は越前北の庄へ引取り一益は勢州桑名へ引取り  
 まして段々世の中の事を考へて居りましたたが少しも早く柴田  
 勝家と羽柴秀吉と戦かいてもさして何方か先へ倒して仕舞い  
 さうして後に己れが一方を倒さうといふ一益は中々悪才に長  
 けて居りますから人を入れて京極の様子を探らした處が秀吉  
 は京都所司代にあつて後には實に萬事に行届き人民擧つて神の  
 如くに尊敬かし九重の御方を奪ねるに是迄の間信長の爲めに  
 悉く狭められて居り尙ほ又日向守天下を握ると雖も只た  
 三日にして此度筑前守の爲めに倒され秀吉代つて所司代にあ  
 り禁裏守職の職に任せられ實に辛い處へ手の届くやうである  
 から上下共に悉く秀吉を信じて居ります様子瀧川一益も  
 是れは中々迂闊に事をする譯に往かんと段々思案を致しまし



太

閑

記

て一ツの計畧を廻らし小姓を招いて 一「外記を呼べ 小親を  
 ましませしした暫時過ちまするどお襦を開き罷り出でましたは鶴  
 殿外記といふモツ年餘五十に相成ります此の人瀧川一益の儀  
 ゐろ刀何かに相談相手に相成る人にて辨舌實に來かてござい  
 ます 一「身近う寄れ一同遠慮致せど近匠を遠ざけ外記を側近  
 く招ぎ 二「扱外記其方を招いたは外の儀ではおい兼て申す通  
 り柴田勝家を怒らして歸國させんと計りしに思ひ通り勝家は  
 立腹をして歸つたか只筑前守秀吉の今日の様子を見るに容身  
 ならん事だ勝家は性愚かにして只己れの勇を頼みと致し只北  
 國七州の藩領あり北の庄の主じといふて我を張つて居るばか  
 りにして誠とに計り易い者だ就ては其の方太儀おがら北の庄  
 へ罷り越して一益病氣に就き代理として罷り越したと申して  
 云々斯うくにして計畧を施ふして貰ひたい 外委細承知致

太

閑

記

しました只今君のお言葉の中に勝家殿を計りて假りに秀吉と  
 和談をさせるさうすれば秀吉も安心して居るから其の暇に兵  
 を整のへて筑前守を討てといふ勝家への申し分は至極面白  
 ございます 一「して勝家は其使節は誰が宜からうかと必ず聞  
 くに相違ないから其の時に筑前守とは別段の間がらてあるゆ  
 え前田又左衛門と夫れに不破彦三原喜四郎等の者が宜いと勸  
 めるソコで北の庄へ三人の者を招いで依頼をするに相違ない  
 爾うすれば三人が引受けて彼の地へ参り秀吉と勝家の仲を即  
 ち結ぶ其時に秀吉快よく和談をするか是れまでの間吳越の思  
 ひをなしたる柴田勝家であるから何と申しても和談をしない  
 といふか秀吉の心中は其時に相分らうと心得る 外「御尤も  
 で夫れは至極宜しうございます早々拙者罷り越やう仕つりま  
 す 一「然らば直ぐに参れ 外「敵を討るには味方を計れと申し



太 閤 記

生すから御家人へ對しても全く君御病氣の様御披露遊ばさ  
れまするやうに若し作病ある事が第一勝家の耳にでも還入り  
ます時は却つて計畧が手違ひに相成りますから今日から御病  
氣の御披露に相成るやうに 一「オ、さういふ事に致さう」と鵜  
殿外記と愛し合せまして瀧川一益俄かに御病氣の沙汰を致し  
た家來の人々に於ては大きに心痛を致しモウ病氣といふ云か  
蹤じめ知れ渡りました頂はひ鵜殿外記に於ては漸々十四五名  
の供人を召連れましたる事に於て北の庄へ参りました既に外  
記と相談を致した時に瀧川一益より大事件に就いて拙者名代  
として鵜殿外記ある者を御地へ差遣はずに依つて本人より萬  
事を聞取りを願うといふ事を隠し言葉で書面にあして先へ  
送つてやりましたからモウ今日あたりは大抵來る時分だと勝  
家も待つて居りました處へ 外申し上げます瀧川一益殿の家

太 閤 記

來鵜殿外記といふ者罷り出でました 勝左様か疎勿のないや  
うに鄭重に取扱かひ案内を致せとソコで案内に連れて城内へ  
遣入つて見ますると流石は北國の藩鎮柴田勝家の居城其の古  
しへは朝倉義景の居城にして一條ヶ谷の名城と世に聞はなる  
處殊に勝家宛分に手入れを致しましたから實に廣大無邊とも  
いふべきほどの立派なる城廓でございませす大廣間は案内を致  
す勝家遙かに此の様子を見て 勝義第瀧川一益の代理鵜殿外  
記といふは其方であるか此處使ひ大儀に存する 外へは  
しき尊顔を拜し外記身に取つて如何ばかりが喜みばしく心得  
ます 勝一益病氣の由ぢやが容體は如何ぢや 外へは風邪の  
心地と打臥したる處追々大熱往來を仕まつり夫が爲めに此度  
自身能り越して一大事の儀を申し上げたく心得しも病いに胃  
されて外出成り難く夫れに依つて某がし代理として罷り出で



太

閣

記

ました勝ッン一大事といふは容易からん事であるが早速其  
 の事を申し述べやうに致せ外、人拂ひを願ひます勝左  
 様であらうとソコで家來の者へ改めて障子唐紙總じて目に當  
 る物を毀らぬ取拂はせ家來の出入りを禁じました勝是では  
 大政夫立階をされる氣支ひはない何事ぢや外、されば主人一  
 益の申し條に此の頃都の様子を窺がひましたる處秀吉頗ぶる  
 人望にて上下共に筑前守秀吉と神の如くに心得實にさうも廣  
 大なる事勝ッン外、伏つて今秀吉を討つて事をなさんとす  
 るは甚はだ難かしく十善萬乘の君の一存にも秀吉が給旨を受  
 ける事はお許しにも相成りませうが他よりして秀吉を征伐す  
 る事を申し出てました處で逆もお免しに相成るまいといふ主  
 人の見込み勝ッン大した勢はひぢやな〇就ては主人の廻  
 らしたる計畧といふは偽はつて筑前守秀吉と和解を遊ばされ

太

閣

記

る勝ッン猿と和談をするか外、左様で計畧がございますか  
 ら御當家よりして秀吉の許へ和談を申し入れ是れまでの間織  
 田家盛んの頃には片方に於ては元老片方は假令足輕奉公  
 をしたとば云ふ條此の度山崎表の戰場に大功を現はし猶は京  
 都所司代禁裏守護職たる筑前守と異越の思ひをするは甚はだ  
 大人氣ない事と考へるに依つて此の度和解を致したいといふ  
 趣むきを仰せられて何者なりともお遣はしになり何が秀吉の  
 喜ぶふやうな遣物でもお遣はしになれば秀吉とて別段に鬼神  
 といふでもお此方から折れて話しをすればうれでも勝家と  
 はどうも席を同じうしさいかど、云ふ氣支ひはかい却つて秀  
 吉は和談が盤のい何より喜ぶ事と存じますテ和解を致す  
 中に京都の様子秀吉の平生の行ないに目を注げ恐れながら三  
 法師君に對して聊さかたりとも行ない正しからざる事あらば



太

閤

記

夫を問題にして終に秀吉征討の事に及ぶといふが上策かど心得ます勝御程只今の處では筑前守を對手に取かひをするは思ひも寄ざる事ゆへ聊さかたりども一時和談を斯く申する勝家より申し入れるが外左様でござひます勝御其の使ひは何者が宜からう外差出がましきやうで恐れ入りまするが愚察する處では今日御當家の旗下に屬して居りまする越前府中の城主前田又左衛門此の方を主任者として夫に不破彦三原喜四郎等何れも一國の主人にして右大臣家御存生中は別段に目を掛けられた人々此の三名を遣はしに相成つたれば如何で……勝成程宜い處へ心附いた最ども宜からう然らば其の通り致すであらうから立歸りて一盆へ宜しく申し呉れ外委細長こまりましたと鶴殿外記に於ては尙ほ言葉飾り勝家を充分説き外併しながら御當家に於ては軍馬調練足馴しに怠た

太

閤

記

りなくやう願ひたく何れ一年か一年半の中には猿而節秀吉の首を見るやうな時もございませうから勝如何にも尤どもだと密談も是れにて相濟み改ためて家來を招き酒宴の用意を致させましたる事にして鄭重の待遇を致し鶴殿外記に於ては厚く禮を述べて別れを告げ立歸る際に勝家手許にありました大黒丸といふ銘の通入つた長光の太刀並びに馬一頭を土産としで外記へ遣はされました◎記に於ては喜みんで是れを拜領して役目を濟せて自分は早々に勢州桑名へ立歸つたが参る時にも忍び歸る時にも忍びでございませう右の次第を瀧川一盆に物語りを致しますると一盆ニッコリ笑つて二イヤ愚か者の勝家我が思ふ儘に候つたり今に見ら必き前田又左衛門不破彦三原喜四郎の人々京都に至り山城國寶寺を本陣として居る秀吉の處へ進物を持つて参るであらうと云つて居ると此方は柴田



太

閑

記

修理之進勝家旗下の大名前田不破原の三名を招いだけれども  
 瀧川一益から出たやうに前田又右衛門始め三人に對して秀吉と  
 の心から出たやうに前田又右衛門始め三人に對して秀吉と  
 和談をして互ひに三法師の君を保護したいと云ふ事を取  
 此の事を取斗らひて貰ひたいと言葉を飾りて申しまするか  
 ら三名も是は勝家に似氣あき事を云ひ出したと思ひあがら  
 又我々固より是れまでの間筑前守秀吉萬事に附けて元老の意  
 に背き互ひに吳越の思ひをなして居られるのを見る心苦しく  
 存じて居りし處元老の方より和解を致すと云ふ事に相成れば  
 此上もなき秀吉とて何ぞ否やを申しませう喜こんで承諾する  
 に相違ござひません如何にも其の使節に我々三人相立つて必  
 事事を遂げて参りませう勝夫れは千萬辱じけおいらばと  
 云ふので越前細千抱搦船粗浪二桶其の外品のを取揃ひて進物

太

閑

記

の印しどなし是れを三名に頼みました何れも支度を整のへて  
 北の庄を立出せましたる時は天正十年十月二十八日北の庄を  
 立出して先づ第一に江州長瀬へ立寄りまする江州長瀬の城は  
 望んで柴田勝家が秀吉から買ひましたる城で當時子息伊賀守  
 の居りまする處三人御機嫌伺ひ旁々立寄りました折から伊賀  
 守と云ふ人病氣でございます是れは瀧川一益のやうに偽病氣  
 ではない眞當の病氣だか何の者より三人の罷り越したるを  
 申し上げると伊是は珍らしき客人であるから病中おがら  
 會を致さうといふので前田を始め三人を病室へ案内を致す床  
 の上に起上つて居りまする伊賀守伊是は各々打揃つて  
 宜く参られた又イヤ久々にて當地へ罷り越したる處御病氣  
 と承まはり我々共大きに失望を致した幸はひにお逢ひ下さ  
 北誠とに辱じけおいらばと云ふので越前細千抱搦船粗浪二桶其の外品のを取揃ひて進物



太

閑

記

近きにあらうと心得ます 伊イヤ鄭重の言葉に驚き辱じ  
 けない實は某がしも一時各々方に對し生前の面會も出來んか  
 ど心得しよとてあつたが漸々兩三日前から快方に趣むき今日  
 は殊に心持が宜い處へ各々の出を聚むりて誠とに幸はいの  
 事に何はあくとも只今酒肴の用意を致させるからどうか快よ  
 く一盞を傾けて戴きたい 又イヤ恐れ入りました御病中御待  
 遇に與かるあどは…… 伊イヤ甚く某がしも鬱を晴して宜  
 いさうか盃を揚げて下さるやうに…… 第一承まはりたいは各  
 々三名何れへかお越しの様子はから何處へお出でなるか 又  
 左様我々共實は是れより京地へ罷り越し山城國寶寺に本陣を  
 取つて居ります筑前守秀吉の方へ参ります心得と又左衛  
 門の言葉を待たせ不破彦三夫れへ進み出で、彦勝豊公へ申  
 し上げます此の度御父上御名案を仰せ出された 伊ア、父

太

閑

記

が名案を施したといふは如何ある事ぞ 孝左れば是迄の間  
 秀吉とは實に吳越の思ひを致し居られたる處年は樂りのもの  
 で此度我々三名を招いてどうか秀吉と和談をしたい而して共  
 々に三法師君の御身の上を保護致したいからどうか和談の取  
 持ちをして呉れど斯様に仰せ出されましてな、ソコで我々三人  
 様々に進物を預がつて秀吉の許へ罷り越して和談の儀を取計  
 らうの心得でござる 伊ハ、アテ見ると何か父が筑前守秀  
 吉と和談をしたいからと各々方三名其の和談の扱かいを頼ま  
 れたのでござるか 彦左様でございます 伊ウムンと勝豊暫  
 らく考へて居りましたが此の伊賀守勝豊といふ人は勝家の眞  
 當の子ではあいなつた子でありますけれども技倆は餘程勝れ  
 て居ります 伊各々の前だが筑前守秀吉と和解を致すから其  
 の取次を各々方に願うといふは夫れは父勝家の意中から出た



太

閨

記

障でない某がし病中ながら其の事を考へるに茲に奸物があつ  
 て平生よりして秀吉と父勝家と不和なるを承知して猶ほ茲に  
 離間策を行ふひ柴田羽柴に戦かばせて其の隙に自分が大利を  
 召めんとする倭人の即ち舌三寸の爲めに父が欺むかれたので  
 むらうと心得る名を差していふも如何かれども此事は柔名の  
 瀧川一益の意中から出たかど斯く申す勝豊は心得る名々の見  
 込みでは京地へ出あつて其の事を申し述べた時に秀吉が快  
 よく承諛を致すと思はれるか但し不服を稱へるか各々方の  
 定はさうでござる 彦先づ彦三の考へでは秀吉は其の位ひの  
 人物ゆゑさればと云ふて速やかに和解を致さうと申すまい  
 彦拙者もさうだ大方何か條件を申し出るに相違ない 伊前口  
 殿はさうだ 又拙者の考へでは心の中では和解を喜ぶふんでも  
 一時は夫を斷はらうと存せらる 伊ウシ此の勝豊の眼中から見

太

閨

記

る時には秀吉は渡りに船と喜こんで和解をするに相違ない各  
 々三人は必き手厚き待遇をなして殊に依ると各々方三名秀吉  
 の口先の爲めに欺されるかも知れない宜く心して居る  
 なさい 又ハ、ア夫はさう云ふもので 伊されば固より筑前  
 守秀吉は斯くして居る間に父の勝家や瀧川一益を倒すの  
 しなけれども今直ぐにする事は出来んと云ふは北國は雪國と  
 いふ位か悉く雪の深い處でモウ當月来月と来ては愈よ盛ん  
 だ本年四月頃までは幾ら戦争をしたくも軍馬を進めるが  
 来かいソコで秀吉がさうしたら宜からうと思ひ居る處へ和解  
 を申し入れるから喜ぶんで和解をするさうして雪解の時分に  
 至つて事をしやうと云ふ考へがあるに相違ひあひ實に恐るべ  
 きは秀吉先づ各々方三名寶寺へ罷り越して秀吉何を云ふか其  
 の可否に拘はらず歸國の折に當城へ立寄つてお話しを願ひた



太 閤 記

い此の折に勝豊再び考へる事もあるから左様思召しを願う  
 と三人に申し入れる不破彦三でも原喜四郎でもナニ二年もい  
 がかい癖に理屈ばかり云つてると餘り念には掛けあかつたが  
 流石前田又右衛門といふ人は是を聞いて心に浮びし事がある  
 か歎然として考へて居りました左右する中に結構なる料理献  
 立の用意を致し勝豊に於ても伊今日には気分も宜ければ久し  
 振りで各々の相手を致さうといふので三名と共に酒を酌み交  
 しソコで三人は暇を告げて長濱の城を出で都を差して罷り越  
 しました此の末如何ある事に成るかど密かに胸を痛めまし  
 たのは伊賀守勝豊でございませぬ此方は筑前守秀吉モウ越前  
 北の庄へ對して十六人からの間者が遣入つて居りますから瀧  
 川一益の使者の來た事から此度進物を持つて前田を始め三名  
 の人々が來ると云ふ事までも悉く探りまして一々秀吉の許

太

へ注進を致して居るからモウ今日あたりは來るであらうと秀  
 吉心待ちに待つて居る處ろい十月二十八日に北の庄を出立し  
 たのが十一月四日に至つて山城國寶寺へ着し茲に三名秀吉に  
 而會をして和解の儀を申し入れるの一條

第五席

太 閤 記

寶寺の本陣に秀吉書見をいたして居ります處へ大谷平馬罷  
 り出で、平「申し上げます 秀「何じや 平「只今前田又左衛門  
 不破彦三、原喜四郎の三名我大の進物を持參いたして君に御面  
 會いたしたいと申し來りました 秀「ハ、ア來たかな 平「へい  
 來ましたかな 秀「好い平馬一厨丁等に扱かはなければいかん  
 一同の者にも其事を申し含めて充分に懇應をいたせ 平「へい  
 さう云ふ譯で 秀「期して物路りをいたす今の處では申す譯に  
 はいかんな秀吉に於ては大綾島帽子を着用して禮儀正しく夫



太 閤 記

へ出で案内に連れて通りましたる三名の顔を見ると、秀吉は各々其後は打絶て無音に過ぎ、甚だ恐縮に存する。然る處、此度打連れて各々方へ出てに相成り、久しかりて對面をいたし、誠に喜ばし先づ暫らくは此處へ御逗留下さる様色々、昔し語りをいたし、手前も心を感さめたく心得る取分けて、前田氏は拙者木下藤吉郎と申す織田家に足輕をいたして居たる時よりして、始終御厚情を給はつたる方ぞ、此處は暫らく御滞在を願ひたい。前イヤは申し後れて甚だ恐れ入る。斯様の御一言を蒙りつては、利家大きに赤面をいたす。昔し今日は中國の探題取分けて、京都所司代禁裡守護職を兼ね、尙ほ三法師君の保護をいたされると云ふ御大切の御方爰に於て古しへの事を仰せられては、却つて又左衛門赤面をいたす。秀イヤ其お言葉に預りては、秀吉大に赤面をいたす。就ては此度は何等の御用あつて参

太 閤 記

られしかど、尋ねに應じ、不破彦三原喜四郎の二人は夫へ出て、兩人早速ながら筑前殿へ申し入れる之に、扣へたる前田又右衛門を始め、我々三名此度北國七州の藩鎮、柴田修理之進勝家殿よりして、此品々粗品には候へ共、其許のお手許へ参らせたいとあつて、我々を使ひとして罷り越した。秀夫はハヤ恐れ入た意外ある進物に預り、秀吉只だ驚ろくの外なく、何で元老より秀吉に斯標お莫大の下されものがあるか、又左衛門進み出で、又夫は餘の儀にあらず、もう年は薬で元老も追々老衰をいたし、年を重ねるに従つて、其志しも追々和らぎ、尤も此間亡君大法會の折柄には、矢張り昔しの氣性を顯はしたるが、北國へ立歸つて考へて見ると、誠に悪るかつた。と云ふ念を起し之までは、秀吉殿に對して、兎角に抵抗する様あ事であつたが、此度はどうぞ其許へ和談をいたしたいと申す事、即ち我々三人此事を頼まれ



大 関 記

て辞み難く罷り越したる次第某し等も共々此和解の儀を御勸  
 め申したく存ゆるが如何ぞとざるかどうぞ此儀を聞濟みに預  
 りたいと又左衛門の云ふ尾に就て不破彦三原喜四郎の兩人も  
 言葉を探へ頼む様にして申し入れる 秀之は恐れ入つた御一  
 言勝家殿は織田家の元老より殊更ら御常家の縁に繁かるもの  
 某しは輕盟より成り上りたるものにて中々柴田殿と吳越の思  
 ひを爲すあどは少しも心にない只だ元老は心内に於て秀  
 吉が今日禁裡守護職とか中國の探題とか云ふ事を面白くなく  
 心得て勵もすれば拙者ふ論鋒を向け白と云へば黒と云ひ黒と  
 云ば赤たと云ふ様な事だ夫が爲めに時々諸人の耳を驚かせる  
 様も事もござる某しは又柴田殿は朋友とは思はない恐れな  
 ら右大臣家無き跡は勝家殿は當家の主君云はば織田家の御隠  
 居と思ふ付に心得る尖に和談をいたすなと云つて折檻ある

大 関 記

下し物などがあつては秀吉只だく 恐縮をするより外はあ  
 何しに夫に異議を申すべき左様に御心の解けたる上は秀吉一  
 音の申す處もかい故に何分ども各々御三方に取扱かひ下さる  
 様に此度は何事ありとも元老を此方へお招き申しても好し又  
 此方から北の庄へ出向ひても好し何事によらき柴田殿の御意  
 に従へて事をいたすから各々御三方宜しくお差圖を願う 又  
 之はイヤ辱むじけなから我々三人に花を持たして和解の儀を御承  
 知下さる事は此上もあいな事だ然らば何れ元老に御面會をいた  
 して勿々打解けてお物語りもいたすでござらうか…… 秀、イ  
 ヲモウ夫は當年でかくも好し一夜明けて花咲く春の頃でも宜  
 し慮て各々方の御都合の好い様に願ひたい 又左様にどうも  
 穩やかに御承諾下さると我々三名も誠に重荷を卸した様お心  
 地いたす何どもお禮の申し様もない位然らば此上共にお願ひ



て辭み難く罷り越したる次第某し等も其々此和解の儀を御勘  
 め申したく存せらるが如何でござるかどうぞ此儀を聞濟みに預  
 りたいと又左衛門の云ふ尾に就て不破彦三原喜四郎の兩人も  
 言葉を送へ頼む様にして申し入れる 秀之は恐れ入つた御一  
 言勝家殿は織田家の元老あり殊更ら御當家の縁に繋がるもの  
 某しは輕輩より成り上りたるものにて中々柴田殿と吳越の思  
 ひを爲すまとは少しも心にない只だ元老は心内に於て秀  
 吉が今日禁裡守職とか中國の探題とか云ふ事を面白くなく  
 心得て動もすれば拙者ふ論鋒を向け白と云へば黒と云ひ黒と  
 云ば赤たと云ふ様な事で夫が爲めに時々諸人の耳を驚かせる  
 様を事もござる某しは又柴田殿は朋友とは思はない恐れな  
 ら右大臣家無き跡は勝家殿は當家の主君云はば織田家の御隠  
 居と思ふ位に心得る尖に和談をいたすなごと云つて斯様ある

下し物などがあつては秀吉只だく 恐縮をするより外は多い  
 何しに夫に異議を申すべき左様に御心の解けたる上は秀吉一  
 言の申す處もまい故に何分ども各々御三方にみ扱かひ下さる  
 様に此度は何事ありとも元老を此方へお招き申しても好し又  
 此方から北の庄へ出向ひても好し何事によらき柴田殿の御意  
 に従へて事をいたすから各々御三方宜しくお差圖を願う 又  
 之はイヤ辱けけない我々三人に花を持たして和解の儀を御承  
 知下さる事は此上もまい事でも然らば何れ元老に御面會をいた  
 して勿々打解けてお物語りもいたすでござらうか…… 秀イ  
 ヤモウ夫は當年でかくも好し一夜明けて花咲く春の頃でも宜  
 し戀て各々方の御都合の好い様に願ひたい 又左様にござるも  
 穩やかに御承諾下さるど我々三名も誠に重荷を卸した様お心  
 地いたす何どもお禮の申し様もない位然らば此上共にお願ひ



太

閨

記

の儀はさうか此度和解の儀は承諾をしたと云ふ事を誓旨認め  
 めて下さる願は此處に於て神文誓詞を願ひたい 秀吉は怪  
 しからん誓詞を見なければならんとまて此秀吉を疑つてお出  
 が利家殿の如きは又此秀吉を疑ふ處から書たものを持って往  
 たい神文がかければ北の庄へ歸つて元老へる物證りが出来  
 いと云ふ事はない筈だ決して某しは左様な者ではない書たも  
 のを差上げるよりは此筑前守秀吉が一言は鐵石の如し左様な  
 疑ひの心を懐いて居られる様では此度の和解の儀は甚だ覺束  
 ない事と存する 又イヤ甚だ恐入つた之は別段に誓詞をお認  
 めに於るには及ばん血判はあさんでも武士たるもの取分けて  
 今日中國の探題であらるゝ御人が仰せらるゝ事に詐はりはな  
 い失禮の事を申し上げて大きに恐入た 秀イヤ各々早速心解  
 けられし以上は某しも安心をいたした併し秀吉の身に就て足

太

閨

記

らざる處あれば充分お差圖に預りたい秀吉書たものは差上げ  
 んでも必らず約束をいたした事を反古にいたすやうな事は  
 いたさんと彼是いたして居る内に山海の珍味を列ぬ結構なる  
 献立をして名々を撰應しまする實に大匠を取扱ふが如くで  
 さいます三名あ於ても大に悦んで居ります處へ太刀一振り  
 宛夫れから馬一頭づゝを下れました三名共さうも驚いた尙ほ  
 連れて参りましたる人足共まで對しても夫て手當をいたし  
 實に行届いたるいたし方に一同の者大に喜び又然らば來年勿  
 々に必らず和解の儀を取結ぶ様に計るでござらう 秀何分ど  
 も宜しく願ふと充分餐應をいたしましたから其處で三名共安  
 堵して立歸りました其處で筑前守秀吉は莞爾笑ひまして 秀  
 いやさうも御香の奴だ恐るべきは瀧川一益何しに勝家は是だ  
 けの事が出来る譯がない必らず之は瀧川一益が入智恵したに



大 関 記

相違ふい只だ氣の毒には前田又左衛門だ彼は天千代の昔しか  
 ら天叻智者と思ひしに今越前の府中に在れば柴田勝家の旗下  
 の大名おればこそ勝家の爲めに今日斯様の使ひなごをさせる  
 は實に氣の毒だ先づ之にて充分に謀事は整のつたりと云つて  
 秀吉に於ては喜んだが之では反對でございませ計りに來た使  
 者を此方で計つたか話分れて直ぐに三名は長濱に籠り越しま  
 した處モウ伊賀守の病氣も全快を致したから一間へ案内をい  
 たし而會をいたして伊賀此度の使ひ御苦勞に存するどう云  
 ふ結果でござつたか不破彦三夫へ出で、不勝豊殿の仰せに  
 は殊に依つたら名々計らるゝと仰せられたが參つて見れば何  
 でもない筑前守秀吉は實は御親父勝家殿を悉く胸中に恐れ  
 て居ると見へ柴田公よりいたして申し入れたる事を聞て秀吉  
 大に喜びニツ返事で先々の事おを述べ右大臣家のおい後は

大 関 記

勝家殿は主人とも思つて居ると云ふ秀吉の一言で來春勿々和  
 解をいたすと云ふ事に相成つて我々此三人に大刀一振り馬一  
 頭つゝを下げ様々の難題をいたし餘り其鄭重なるは秀吉の答  
 への速やかなるに實に驚いた位伊賀守殿のお氣支ひではあつ  
 たが事は充分に成願いたしまして伊ッン左様か秀吉は和談  
 の議を承知して様々の難題をいたしたか實に秀吉の心の裡は  
 容易ならん事で併し名々の使ひ大儀でありたフ、ン、不  
 何でおどる我々の前でフンとお笑ひおさるは伊イヤ何で  
 各々の前に於て笑ひなごを漏さんフ、ン、不之ははしからん  
 何か冷笑をなまる様に心得る伊イヤ某しは病後の事とて咳  
 も出れば嘘みも出るフ、ン、不嫌お咳が出るね伊さうどう  
 も一々お答りに預つては勝豊還魂をいたす拙者は決して此場  
 に於て笑ふおささ、云ふ事はない」と申されたが又左衛門一人が



太

閑

記

此様子をを見て考へた原、不破の二人は一向に氣が着かんから  
 不我々使若として罷越し充分ある結果を得て立歸つたに於て  
 は御尊父に於ても嘸御満足に思召さると心得るに何か伊賀  
 殿には御不満の体にて笑を漏らされる甚だ心得ない事 伊賀  
 うどうも一々お咎めを蒙つては困ります併しさう仰せらる  
 へなればお話しをいたすが秀吉が今各々の音聲に對し異論を  
 扱む様おれば何でもないけれども悦んで速かに和解をいたす  
 と云ふ事は甚だ氣支はしい事で歸り只今北國に軍馬を向けん  
 どしても雪國にして中々進む事能はずされれば來正月二月の頃  
 は穏やかなる色を見せて四五月頃の雪解を待つて事を遂げや  
 うと云ふ筑前守の腹であるに相違ない其前に彼は必らず瀧川  
 一益を攻め進んで清州の北畠信雄を攻め岐阜の神戸三七郎  
 信隆を攻め進んで當江州長濱の城をも己れの手に戻さんとす

太

閑

記

る心あるに相違ない各々に對面をして快よく酒を酌むも彼が  
 謀事である併し此事は立歸つても必らず父に云ふて下さるお  
 各々三人へ對して伊賀か意中だけを述べたのであると聲て前  
 田又左衛門はさうも伊賀守の考へが好いと思ひましたが不破  
 原の兩名は何伊賀守が左までの年でもおまい癖に生意氣な事を  
 云ふソナナ事はないと心の裡に思つて別れを告げて長濱を立  
 ち北の庄へ立歸へる伊賀守は其跡にて痛く心を痛めて居りま  
 したお話し別れて筑前守秀吉は使者を返へして早速黒田官兵  
 衛淺野將兵衛を招ひて外の者を遠ざけ茲に兩人に對し密意を  
 含めて直ちに軍馬の用意を爲し第一に勢州桑名へ乗込んで瀧  
 川一益に一泡吹かさんと茲に其用難へ及ぶのお話し

第六席

三名の使者は恙なく北の庄へ立歸りましたが長濱に立寄つて伊



太

閨

記

賀守に申した事だけは云つたが勝豊が云々所様へに申した  
 と云ふ事は勝家の氣性が氣性でございませうから二人とも合  
 して是を話しません據ふるなく和解の由秀吉承諾致して大  
 に喜んだと言葉に花を添へて申しましたから勝家胸中に先  
 づ宜い鹽梅だと思ひ通り那の機を計つたと思つたが中々此機が  
 計られるやうな機ではあゝ三名の者へは相當の品を贈つて其  
 券を謝し夫々北の庄を退散致して自分の居城へ引取りました  
 した前田又左衛門に於ても越前府中の居城へ引取りました  
 人と云ふ者は妙さ處へ感徳を起すもので此間伊賀守の云はれ  
 る通り秀吉はさう云ふやうな者ではない木下藤吉郎の昔しよ  
 り今日までの事を數ふるに彼がなせる處一として見損じたる  
 事なく然して彼は今日に至つても尚木下藤吉郎の昔しを忘れ  
 ない御主君か宋だ上總介信長と仰せられし陰はい自分前田

太

閨

記

大千代と申し木下の爲にも執成をなし又彼は某がしの爲めに  
 力にかつて呉れたるもある夫が追々に出世をして某がしは今  
 日越前府中を賜はつて居る然るに柴田勝家は元老なり旗頭な  
 りであるから自づから此勝家に尽さざりければならんやうに  
 なつてゐる然して秀吉が此度の計らひは心あつて致したに違  
 ひない又修理進勝家は自分の意から出て和解を好やうか人  
 ない智慧のない人が幾ら考がへても往ぬ下手考がへ休むに  
 似たりと云つて此人の考がへでは祿な考がへではあゝ是は何  
 でも力ある人が考へて勝家に吹掛けたのであらう又左衛門利  
 家は考へが付したからソコで此頭では少し病氣様な形で誰に  
 も逢近待の者小姓たりと雖も濫に入らる事はあらんと仰られ  
 一室に候つて候りに御用を御して居りますければ本ばかり  
 う引付けて願んで様うもかい御用のある時分には鈴を鳴す



太

閤

記

小性が夫へ参りまするも唯其用談を述べただけでございませ  
 からトント外の事は分りません古老の人々も大きに心配を致  
 して居りますと茲に當家の重臣に長九郎左衛門重行と云ふ  
 又左衛門の御相談對手でございませ此人が取次ぎを以て御目  
 通りを願ふの心抵然るに取次ぎの者が  
 ○此頃は出這入り  
 する事を濫りにお許しになりません鈴を鳴しませ其時に参  
 らなげれば其餘は此方から伺かう事は出来せんから暫時御  
 座を願います九ハ、一鈴を鳴すまで行く事は出来んとは  
 とう云ふ次第であるか ○イヤ何か御書見を遊ばして居りま  
 す九書見をおすつて居る飯合書見をなすつて居ても用事あ  
 つて罷り越した者を目通りを仰せ付けられんと云ふ事はあ  
 りまい九郎左衛門出仕をした事を早々申し上げて呉れろお叱り  
 があつたら九郎左衛門が詫をす何分にも願むと申しませる

太

閤

記

ゆへお小姓も仕方かあいからぬ次ぎへ参つて 小恐れながら  
 申し上げます 又予は少々考がへる事あり夫ゆゑ出入りを禁  
 じてある鈴を鳴さんければ是へ参つてはならんと那れ程申し  
 付けて置たに濫りに夫へ参ると云ふは如何なる事だ 小恐れ  
 入りまするが只今長九郎左衛門罷り出でましてお目通り願  
 呉れろと申しまして一旦はお許しに相成らんも申し述べ  
 ましたが強て願ひ呉れろと九郎左衛門より申し出でました事  
 でお咎めがゆらば九郎左衛門が詫を致すとまで申しました  
 又ウム九郎左衛門か夫ならは何故早々左様申さん九郎左衛門  
 なれば苦しうかい早々是へ呼へと仰せがござりましたから直  
 ちに九郎左衛門夫へ罷り出でました 九お目通り仰せ付けら  
 れまして身に取ら大慶の存じまする近頃御病氣の由承知致し  
 ました御病氣なれば早速醫者を招いて診察を受けられ尙薬用



太

閑

記

手當てを致さふければありませぬ然るに承たまはれば一瀆の  
 お薬りも用ひられず只辭々として樂しまざる御様子如何ある  
 御病氣でございませぬや又九郎左衛門宜い所へ参つた其方  
 ならば差支へなく物語りを致す予の病氣と申するは誠とに聊  
 さかある事で九郎左衛門申し上げます若の御  
 病氣と申すは此度柴田勝家の依頼に依りて都へお出でになり  
 前守秀吉の本陣を致される寶寺へお出てに相成りしが御病氣  
 の原因かど存じませぬ又ウムさうだ九今日に至り何か  
 心付きに相成りませぬか苦しからせぬせ開けられたう存じ  
 ます又ウム九郎左衛門其方が夫までに申すならば物語り  
 を致す秀吉に而會を致したる處速やかに和談を聞届け且ッ面  
 々をさましくに待遇し名馬太刀までも贈られた一旦は悦みん  
 で歸國は致したが今日退ぞいて考かへて見ると是は秀吉心か

太

閑

記

ら悦みんで和談をしたものではなと思ふかどうだ九七と  
 も左様で秀吉と云ふ人は天地を吞する位ぬの枝備のある人  
 の仰せの通り心悅みんで和談を致したのではございませぬ  
 今秀吉の和談をするは深き巧みのある事と九郎右衛門は存じ  
 居ります某がし察するに日ならず勢州に戦さを起すに相違  
 ざいませぬ又ウム九瀧川一益を力攻めに致し尾州清州に  
 人数を配り北畠信雄を亡ぼし濃州岐阜へ人数を進め神戶信孝  
 を攻め夫より江州長濱の城を取返し進んで北國へ軍馬を向け  
 勝家流側さんとするの秀吉に深き巧みあるに相違ございませ  
 ん併し雪深く常分兵を出す事が出来ませぬからどうかなして  
 奉年の四五月頃まで軍馬を出さす内々く事をしやうと思つ  
 て居る處へ反つて勝家より和談の儀を申し込んだに依りて彼は  
 心中大いに喜こんで事を致したものと考かへます又予も左







太 閤 記

所ながら見てお在でなさるが宜しうございます方。一北の庄に於て人敷を進むるにしても御當家に於ては人敷を出さんが宜しうございます。又然れば勝家必ら立腹を致すであらう。九其時には病氣一筋張り恐れながら御前に於ては御病氣を仰せられて是から先も當分北の庄おさへは出では御無用でございませぬ其内に戦さか初まる若し勝家滅亡を致するに於ては其時にては御前に於ては秀吉に對して御味方をお遂げ遊ばして大軍をございませぬ尤ども計器を施すには一ツの難儀がございませぬ其難儀の事さへお波ご遊ばせば前田の家永々に榮へまする爰に一ツの計器がございませぬが君には如何思召さるか。又九郎左衛門其方の名智を以て予に其事を申し聞かせ呉れ。九是は恐れ入り申した名智を以て聞し呉れつとの仰せ甚はだ恐れ入り申する匠心にあつて申さざれば反つて不忠かり善悪

太 閤 記

に拘はらず九郎左衛門の意中申し上げますると夫へ進みまして是加州のお家に長の家を残します剛い人物で茲に其九郎左衛門に就て傳記を聊ざか申述べおければお分りになりませぬから掻摘んでお話しを致します抑々長のお先祖を尋ねるに高倉の宮に味方を致したる長谷部長兵衛尉信連の子にして長谷部と云ふ人は高倉の宮に味方をして治承二年五月十五日三井寺へ落たる時に大勢を對手にして戦かい遂に檢非違使の爲めに生捕られました其時に人を切りましたる事十有餘人でございましてが遂に多勢に無勢方尽て生捕に相成りました此手に飛向いましたる檢非違使の役人どもは梶野頼負尉政元にして飛騨左衛門尉景家の係りにあつて六波羅の半へ入れられました入牢を致したけれども固より天下の家傑ゆゑ更に恐れぬ眼が劣ると手を叩いて飲を持って來いの酒を持って來いのだ云つて



太 閤 記

仕方があひ打捨て置と暴れるサア酒を持って来ねへど叩毀すぞ  
 半を破つて貴様達を塵しにするぞと狂ひまするので仕方があ  
 い半番の者は内々酒でも持つて行てやると夫が中々一合や二合  
 では承知しあひ一升か二升の酒を持って行つてやらなければ満  
 足をしないから仕舞ひには幾ら暴れても對手にせずには掛  
 した長兵衛は相變ら半内にて於て暴れ放題に暴れたが誰も掛  
 はないから仕方がない途には自分も暴れ疲れて仕舞うやうか  
 其内に守治の殿かひに敵破れたと云ふ事を聞と長兵衛此處  
 に六波羅の半を出たが中であら暴れ居たが現世の中へ出て  
 見ると身体が疲れて居るから思ふやうに歩けない七八町も行  
 くとは轉げ又起き上がつて行つては轉げ漸々にして道を進つ  
 て参りますず其間も追手が来たら拳殺して呉れやうと云ふ勇

太 閤 記

氣の充分に満み四邊りに心を配つて参りますすければも何分腹  
 が空つて堪りません腹にも働らくにも腹が穴て居ては仕方が  
 がございませんから何か此邊にないかと歩きながらに彼方を  
 見れば遙かにテラ〜と燈火が見へまする是幸はひと思ひ其  
 燈火を便りに参つて見ますると餘程隠々とした所 長御免よ  
 ○ハイ 長往來の者だが道を間違て大きに難澁をするが暫時  
 休まして貰ひたい ○ア、さうかへ〜と云つたが色の黒い眼の  
 ギョロツとした何か一癖ありげな男 ○何所から間違つてこ  
 ざつたへ 長さうさ何所を間違いたと云ふのが知れる位ゆゑ  
 ら間違へる氣支へはあいか何所ともなくふんか所へ来て仕舞  
 つた何は兎もあれ眼が空て堪らないさうか一ツ飯を振舞て貰  
 みたいものだ ○是は飛た事を云ふる前方に食せるやうな物  
 はない私は全休酒飲みで飯は澤山食ない幾らか錢を取ると飲



大 閤 記

んで仕舞ひ宜い心持ちになつて物を食はせに寐て仕舞うやう  
 な性分中々人に食せるだけの飯をどを取つて置事はあゝ長  
 ウム夫は困つたな ○金体お向さんは妙お顔付きをして居る  
 が何所だへ住居は 長私に京都だ ○京都だつて廣いお何だ  
 か其様子が半破りでもしたやうな鹽梅だお云はれて長兵衛  
 拳を固めて批殺さうとした様子早くも見て取り ○ヤアお前  
 さんが半破りをした所が何も構はねへ私に掛り合つた事あれ  
 ば兎に角何も私には及ばぬへ 長ウム貴様は何も構はんか ○何も  
 めて殴るには及ばぬへ 長ウム貴様は何も構はんか ○何も  
 構う事はあゝい 長ウムならは私の方でも察する所はあゝ實は  
 貴様の批量通り六波羅の半破りをして来た ○どうれで罷さ  
 うな人だと思つた 長何しろ腹が空つて堪らない長兵衛四邊  
 をキヨロくど見ると左り手の所に高盛りにした飯がある是

大 閤 記

を見たから堪らぬい 長ヤイ貴様嘘を吐くな飯があるではあ  
 いか ○何あるものか此通りお鉢は空々だ 長夫でも那れに  
 山盛にしてあるのはあんだ ○あるつたつてあんな物は食へ  
 るものか 長何故食へない ○お前さん松の商業を知らぬい  
 のだらうが私の家は御坊屋だ 長御坊屋 ○へエ 長御坊屋  
 ど云ふのは何だ ○人を焼くのだ 長生てるのか ○生てる  
 のを焼奴があるものか死んだのを焼くのだ此通り是から死人  
 に火を照けて焼くのが私に御坊の浦右衛門と云ふ者だ 長  
 ウム那の飯は何だ 捕那れは枕飯と云つて縁義が悪いのだ  
 長縁義が悪いやうな奴かあるものか枕飯でも何でも構はんか  
 ら持て来い 浦夫で宜ければ食ひなさい 長何か外にか  
 浦何にもない爰に盃がある共盃を掛て食ひなさい 長夫は辱  
 じけぬい成程貴様は御坊の浦右衛門と云つて死人を焼く稼業



太 閤 記

か 浦さうだ 長ウムワンボウ焼て押付ろとは貴様の事だな  
浦違つてらア……ど左右する内に長兵衛腹の経た苦し紛れに  
枕伏を取て食て仕舞いましてがどうも其時の味はいは別段で  
ございませす空腹時に不味の物おしとは能く云つたもので尋常  
の時には食へるものでない 長どうも御坊様とに辱じけさい  
浦無暗に御坊様と云つて呉んなさんお私の名前は浦右衛門  
と云ふのだ 長ろんな名前などは覺えちやア居さいと腹  
が出来たら眠くなつて来た茲に寐て居て追手が来ると面倒だ  
から何所かゴロリ寝る所はあるまいか 浦ろんな所はさい  
○ヤッ来た 長何が来たへ 浦見た様子では七八人殊に  
依ると追手が掛つたかも知れないうしてお前さん茲に居ち  
やア仕方方がおい逃げて行くにも逃してやりたいにも斯う云ふ  
所だから外へ出れば直ぐに捕まるア、困つた事が出来たな

太 閤 記

ウム夫ぢやア斯うしなさい火屋へ少し通入て居るさい 長何  
だへ火屋と云ふのは 浦死人を入れて火を貼ける所だ 長夫  
は往けない火を付ける時は能く見てやるから 長夫れぢやアど  
方でも火を付ける時には能く見てやるから 長夫れぢやアど  
うか頼むと夫から長兵衛火屋の中へ通入て下を向いて寝て居  
りますす今日の火葬場と違つて其時分の事ゆゑ不完全なもので  
掃除も能く届さいから随分臭気甚はだしい所だが仕方がない  
から中へ通入り上から蓋をして仕舞だ所へ大波羅の方より夫  
へ参つたは七八人 人今此御坊小居へ半破りの者が一人参ら  
んか身の丈け勝れた月代の生へた者だ 浦イエろんお者は参  
りませせん X只来ないどばかりでは往かん悉皆吟味をするか  
ら左様心得ろ 浦エ、何所でも御覽なさい此通り誰も居ない  
私一人だ Xウム夫から其邊りを段々改めたためだが目に當る者



太

閣

記

もまい **×** 然らば金たぐ来ないか 浦必ら参りません **×**  
 夫では火屋を改ためるが宜いか 浦エ、 **／＼** 何所でも御覺な  
 さい隠し立てをしたさき、思はれちやア迷破ですからどうか  
 悉皆見てお呉んおさい此通り今死人を入れて火を掛るばかり  
 になつて居りませう何なら死人を出して御覽に入れませうかと  
 云いながら片ツボの火屋の蓋を開けるとモウ火を掛るやうに  
 かつて死人が這入て居る **×** どうも臭いな 浦臭いたつて當  
 前だ **△** 宜し **／＼** 此方を開ける左りの方を開ると茲は薄暗い  
 所で明瞭とは分らんが矢張り這入つて居る **×** ウム是は若物  
 を着て居るお 浦ハイ **×** 變だな何故是ばかり若物を着て居  
 る 浦だつてお前さん夫は背い面をしているのだ二夕目と見  
 られない切殺されたんだがどうも其傷と云つたら八ヶ所や十  
 ヶ所ぢやアない手も付けられぬから仕方なしに其儘打込ん

太

閣

記

だ怪しいと思ふなら出して御覽に入れませうか幾ら役人でも  
 薄氣味が悪いし殊に臭氣はたしものだから **×** まア **／＼**  
 宜い **／＼** 浦夫でも一ツ御覽に入れませう又疑がひが掛つて  
 は往けないから **×** 宜いと申すに **／＼** 一同の者彼方此方を見廻  
 しましたが別に怪しい所もおさいませんから其儘引揚げて仕  
 舞う火屋の内に這入つて居た長兵衛はア、良い隙梅だ併し此  
 御坊の浦右衛門と云ふ奴も強膽な奴だモウ此蓋を開けられた  
 時には仕方がないから腕力に訴たへて再び人殺しをせやう  
 と思つたが危うい所を助けて呉れたと喜ぶんで居りましたが  
 安心をした故か火屋の中でグ **／＼** 寝て仕舞たさうも大變な  
 ので火屋の中で御をかい寝る者は此長兵衛の外にはあま  
 すまい其内に浦右衛門是を呼起して 浦少しも早く退散をし  
 たら宜からう其時は長兵衛 長誠と浦右衛門辱じけぬ我



記 閑 太  
 れ世の中に出来る時は必らず厚く恩賞の沙汰に及ぶからさう  
 か其時を待て呉れろと厚く禮を述べ長兵衛は遂に此御坊小  
 を立出で北國へ遂々戻りました其時分長兵衛に於ては能登  
 の七尾に暫らく匿れ時ころあれと待て居りましたが遂に再た  
 ひ世に出で能登國中津の城主とあり其子九郎左衛門長谷部  
 安藤守義進と云ふ者其頃加賀能登越中に其の名を轟ろかした  
 る諸侯で然るに同國に七尾の城主畠山修理太輔義隆と云へる  
 人あり無二の交はりをして居りました所が義隆落命をして  
 後に伯父に當る彌五郎義春と云ふ者悉とく宜からざる人ゆ  
 る是と争ひをさせしに義春に於ては自分の力で及ばざる所か  
 ら上杉謙信に仕へ謙信の力を借りて遂々七尾を横領して仕舞  
 た此時安藤守に於ては残念ながら一旦茲を立退き御子息に委  
 細の事を遺言して自分には生害を遂げた其伴九郎左衛門織田家

記 閑 太  
 に仕へ長谷部の姓を名乗るも如何と茲に其頭字を取て長九郎  
 左衛門と云ふ事にして信長に奉公を致して居りました所信長  
 公の命に依て前田又左衛門に屬するやう仰せ付けられ主命な  
 れば是非に及ばせ前田の家來と相成りました所實に名智の人  
 でありますから前田又左衛門の爲めに相談對手とも相成り又  
 左衛門何かに付けて此者の意見を聞かす程の人でございま  
 す借茲に其長九郎左衛門主人と密々相談をして天正十年十一  
 月府中を出陣して北の庄へ至柴田修理之進勝家の許へ使者を  
 出すの一件から話して別れて筑前守秀吉長濱の城を取返さん  
 と心得茲に大はいに智恵袋を振るひまするのお話しに相成り  
 ます

第七席

明智の秀吉北の庄よりの使節三人を詐つて和談を申し雪解を



太 閤 記

待て軍馬を進め様と云ふ勝家の下心位之の事は早くも知りたる人故敵の謀事を以て敵を破らんと云ふ反間苦肉の計畧は尤も秀吉が得意とする處にて扱三人の者は立歸へり跡に残りませした秀吉直ちに黒田官兵衛、淺野彈兵衛を呼んで軍馬の用意を命じ尙大谷刑部を招がれませした故何事かど心得刑部夫へ追み出て、刑部恐れながら何等の御用であり升か仰せ聞かせられ度、秀イヤ平馬其方を呼んだは外でもまい此度北の庄よりして我を欺むく心底にて前田又左衛門、不破彦三、原喜四郎の三人を遣はし和談の儀を申し送つたに依て是を心能く承知し名々を歸へした熱々思ひ合せし處何分長濱の城を柴田の手に渡して置ては軍兵を進めるに就ても不都合と思ひ、平尤も左様でございませ之を取返したる彼雪解を待て柴田と合戦を遊ばした方が宜しうございませす、秀就ては長濱の城を取返す工

太 閤 記

風は斯様くいたしたらどうだ、平成程仰せの如く手前にては柴田伊賀守勝豊の家來家老の列に加はり留りましたる木下半左衛門と親友でございませすから之を一ツの手掛りとして事をいたしませれば必らず遂げられんと云ふ事はありません、秀然らばどうぞ其方長濱へ參つて事を謀つて貰いたい、幸い伊賀守とも知合の間柄で豫て兵學を共に學びました事がございませす夫に二三回交遊をいたした事もありませんから仰せの通り取斗らうでございませうと大谷平馬と秀吉が約束をいたしました平馬に於ては御前を下り俄かに支度をして家來としてもホンの二三人連れまして江州長濱へ罷越して伊賀守の家來家老の列に加はつて居る處の木下半左衛門が親友でありますから此半左衛門方へ訪づれて参りました半左衛門に於ては大に喜んで半之はどうも好くお出でになつた、平ヤアどうも



太

閑

記

御無沙汰をいたした半亂世は御同様に無沙汰勝で殊に暇場  
 で顔を見て居ても口を開く事も出来ん様な陣でレヲお手前は  
 何か御用でもあつて替地へ参られたか平イヤ少々不加減で  
 夫に母が大層体が悪いので上より暇を貰つて此地へ参つた  
 半左様か又處の變ると云ふと大きに病おとに好いもので何  
 は兎もあれ一盞酌くでござらうと早速酒の用意をして饗應し  
 まする平馬に於ても心安き半左衛門おれば酒を酌んで居りま  
 する處へ若侍が罷り廻して若只今御家老富永石見守殿が  
 出でになりました半ナニ富永石見守が参つたどお一人か又  
 御同行があるか若大御殿八匹田左近のお二人が御同道で  
 半ア、さうか夫は丁度好い處で此平馬殿に於ても少々知人で  
 あるから此方へ直ぐに御案内をしたら宜からう若侍共まつて  
 下る程もあく石見守先立になつて三人夫へ参りました半ど

太

閑

記

うも好い處へ参られた先づ之へ石ヤア誰かと思つたら  
 大谷氏で賑に暫らくであつた御免と石見守は正面の處へ着座  
 をいたす大鐘藤八匹田左近に於ても一々挨拶をしたが暇場往  
 來をして居る人々沙汰も細やかであいの時侯寒暖を  
 述べるだけで言葉も器直ぐに盃を献し互に酌み交して居り  
 ましたか時に石見守は少しく進んで石大谷氏は全休何等の  
 用事があつて此邊に來たか其邊を承知したい平イヤ私しは  
 別に用事があつて参つたでもない石見守も全で用事がな  
 ければ來る事もなからう平實は拙者釣りに参つた石何の  
 釣りに來おすつた平實は木下氏にも一寸申したが母が前氣  
 で醫者の申すには剛が大層功のあるものださうで夫も小さい  
 のでは好い二尺餘の剛を料理して喰べさせれば必らず疲勞  
 をしたのも快くなる云ふ事を聞たがさうも私しの居た近邊



太 閣 記

には剛が居ない近頃聞には長流には大分居ると云ふ事だか  
 ら一尾でも互いから釣て来てくれと頼まれた否とも云はれぬ  
 二十四孝の王祥に均しき事だか母から望まれて釣りに参つた  
 半夫はさうも孝行な事で成程仰せの通り王祥にも均しき業で  
 暇場往來をする氣性の荒々しき武士のいたす事とも思はれん  
 位併し其か優しい心は恐入つた此唐士の二十四孝と云ふは虚  
 の話しが大分ある様子其中にも随分お咄しお出来ない様なの  
 がございませす第一寒中に鯉が喰いたいと何のと云ふ母も無理  
 だし王祥と云ふ人が鯉を釣りに往た處氷りが張て居てさうも  
 釣る事が出来ぬさうしたら好かろうと色々と考へた末素裸  
 体になつて氷の上三日三夜仰向になつて居たら自分の活氣  
 で氷が解けてイヤ孝行の徳に依て鯉が氷りの上に躍上つたと  
 云ふお話しだが心得違ひの鯉があるもので、けれも私(燕林)の

太 閣 記

考へにはさうも此理風は分らないと男が氷の上に裸体になつ  
 て寐て居た其活氣で氷りが解けたら王祥が氷の中へ落込つて  
 仕舞おければならぬ夫に依て見れば全く作り事で………作物だ  
 が之おとは好く出来て居る方とございませす、餘事を申し上げて  
 恐れ入りますが大谷平馬は二尺餘の剛を釣りに来たと云ふと  
 半ツン左様か夫はさうも恐入つた事で孝行は何よりの事だ」と  
 譽めたのは木下半左衛門スルと片邊に扣へて居た富永石見守  
 は石さうも大谷氏の仰せだが拙者は其事を誠には思はれん  
 平「ル」ア何故拙者の云ふ事が信じられませんか 石「ナ」せと申  
 して夫は好かん當地へ参つて二尺餘の剛を釣るあゝとは欺り  
 で其質は外に用事あつて参つたに相違ない、此度北國の柴田勝  
 家元老たる御方が自身に和談を望み山城國寶寺の秀吉の本陣  
 へ前田又左衛門を始め三人の使者を遣はしたと云ふを聴んで



太

閤

記

其和談に應じた秀吉の意中が分らん、之は拙者だけの事へだが、恐らくは雪の解けるを待て事を起すの心底に相違あるまい、其時に北國から兵の來るのを待て居る様な秀吉ではあゝ必らず自分の方から進んで往くだらう、さう云ふ場合には足溜りにするには當長濱の城だ依て大谷は當城内の様子を窺ひに参つたのであらうと云ふて木下半左衛門も手を拍て半成程之は好い處へ氣が着た如何にも夫に相違ない、此時色を變へて大谷平馬半之は意外の仰せを受たまはるものか、某しは全く母の命に依つて二尺餘の鮒を釣らんか爲めに之へ参つた夫れおれば、あろ半左衛門殿方へ厄介になつて各々のお出でになつたに就ても御面會をして斯くお物語りをいたす、若し某がし當城へ間者に参つた者おれば、何で之を尋ねて参らう、左様なごうも浮説を立てられては大きに迷球をいたす主人秀吉は左様なご

太

閤

記

は決してあゝ石イヤある然らば、平然らば主人秀吉は當長濱を攻落して自分の足溜りに仕やうと云ふ了節だと仰せらるゝか、石焉にもさうだ、溜然らば拙者の意中を聊さか申し述べん、假りに當長濱に對して筑前守秀吉が軍馬を向けるとして、も當城内に在する處の伊賀守勝豊と云ふ人は中々、常の人で、あゝ又失禮おがら側には行々方ひ如き英雄智者、澤山あるから、容易に長濱の城を攻めると云ふ戦は出来難い、力攻めにした處が中々落ちる氣支ひはない、其處で我々共が只長濱の城を攻め、て居る間に尾州春日井の郡清洲には北畠信雄殿が居る、此方、は當長濱に助勢し又岐阜には神戸信孝殿、此人最も筑前守とは、反對の位置に立てる出でなさるから、勿論長濱へ身方する夫に、桑名には瀧川一益が在れば、何ぞ夫を傍觀して居らうか、必らず兵を起す、さう斯うする内に雪解になつたら、柴田勝家殿に於て



も北國よりして人数を進め當地へ乘込んで来るに相違ないさ  
うなつたら秀吉が甚だ危いかと承知いたす己れの体を火の中  
へ入れる様なる秀吉ではおれ左すれば各々の心得違いかと拙  
者は存する「ウーン」と互いに顔見合して居たが半成程さう云  
へばさうだ斯く申する半左衛門も一時大に疑いを懐いたが仰  
せらるゝ處を聞いて見れば成程濫りに筑前守が當地へ兵を向け  
る様な事もあるまい」と云ふのを聞いて大谷平馬はしてやつたり  
と思ひ其圖に乗つて二三物語りをいたし固より辨舌の勝れた  
る人であるから名々の感さするやうに四方山の話しにつれて  
時勢を語りました石見守を始めとして大鐘藤八、四田左近等の  
人々に於ても實に恐入つたと云い流石之へ来る程の平馬であ  
るから其場で參つて言葉に淀みなく是等の人々を遂に脱服せ  
仕舞いしましたさうして其翌日から平馬は長瀬の川へ出で釣

りを垂れて居る宿永石見守始め一同の者はハア是は別に用が  
あつて来たのではおれ全く釣りに来たのであらうと云ふ然る  
處此城下に居る處早くも此大谷平馬が當地に来て居ると云ふ  
事が伊賀守の耳に達入つた伊賀守と云ふ人は父の勝家とは違  
い智者であります尤も平馬とは共に兵學を學んだ事もある至  
極悪意の中でありますから早速此平馬に目遣りを許すと云ふ  
事にあつた其處で平馬は伊賀守の御前へ罷り出で、一應の挨拶  
移りも済み改めて酒饗となり夫より兵學の秘密の語しになると  
家來を遠ざけて二人がヒソ／＼と語りをする平馬に於てはモッ  
へり又翌日來てはヒソ／＼物語りをする平馬に於てはモッ  
で勝豊が野心あるものど人に思はれたると心得ました時分に  
果せる哉彼の側に扣へて居た二名の奸物一人は山路將監と云  
い一人は神谷越中守之は豫て北の庄よりして内々で長瀬に居



太 閤 記

る名々の器動に目を付けて居るものであり  
 ます、されば近頃伊賀守勝豊が秀吉の家來大谷平馬を側近に  
 て密謀をいたすと云ふは伊賀守が巨意をいたしたに相違ない  
 今に之は破裂するであらうと云ふ心得を起し捨置かれんから  
 直に次第を山路將監より柴田勝家の許に通じました勝家は元  
 より思慮深からざる人であるから好くも事を糾さず將監の通  
 知を真と思ひ直ちに江州長濱の伊賀守の許に使節を送り三日  
 内に其處を引揃へると云ふ嚴命であります伊賀守に於ても大に  
 感念に心得ましたけれども居やうとしても居られない場合さ  
 う斯うする内に木下半左衛門に於ては富永石見守の意中を察  
 しましたる事にして改めて筑前守秀吉へ降参をするの事より  
 安土城へ對して伊賀守登城をいたすの一條

第八席

太 閤 記

木下半左衛門始め各々に施したる謀事充分に成就して遂に柴  
 田伊賀守勝豊も寶寺の筑前守の本陣へ來り尙ほ次第によれば  
 秀吉の身方をするの志しに相成りました此方は山路將監より  
 右の由を北の庄の勝家の許に告げましたから修理之進勝家は  
 烈火の如くに憤ふり直ちに勝豊の許へ書面を遣はしました早  
 速に富永石見守へ申し付け開封をさせた處が中は封書でござ  
 いませず封書と唱へるは餘程何か大事な事であければいたすべ  
 き事でない扱は何事か出来たかと思ふに於ても中々思慮深  
 き人でありませずから開かせて見れば案の條勝家悉く立腹を  
 して三日の間に長濱の城を明渡し當地よりして使ひ参り次第  
 急ぎ北の庄へ立歸へるべしと認めてありませず石見守莞爾と笑  
 ひ石見守の立歸へるべしと認めてありませず石見守莞爾と笑  
 事の善悪を未だ聞かずして君が室寺の秀吉の本陣へ参りしと



太

閏

記

云ひ又安士へ對して御尋城になつたと云ふ麻を以て斯る書面  
 をお送りにおる位なれば迂濶に北の庄へお歸へりに相成るは  
 御無用にございませぬ伊ッンけれども三日の間は城を明渡せ  
 と云ふ書面であるは五其儘は思ひもよらざる事を目下御盛  
 んにして三日の間は軍馬を向けるに云ふ事はございませぬさ  
 れば中々城受取に參る者か參る筈はありませぬ只だ人を驚ろ  
 かせる事と存じますけれども此上はしく思慮あつて然るべ  
 く存じます伊賀守實にもと思ひ願ふは勝家の志しも分り側  
 に倭人の居る様子も分りましたから其處で思慮を廻らして居  
 る茲にお話分れて筑前守秀吉室寺の本陣を家來に預け一先づ  
 播州姫路へ歸城に相成つたのは天正十年十二月二十九日明く  
 れば天正十一年正月元日より三日の間一同の者御年始恐候を  
 申し上る秀吉は禮儀正しくして臣等一統の者の禮を受ける五

太

閏

記

日の日まで姫路に罷り在て直ぐに室寺へ歸られ之に於て又手  
 廻りの者一同の年始を受けて夫より京都へお歸しになりまし  
 た秀吉と云ふ人は何事も早い人で少しも猶豫しおない爲るだけ  
 の事はズンとしたのが此人の得意でございませぬ京都へお歸り  
 まして六條の本國寺を旅館として一日休息し正月七日参内し  
 て恐れながら御帝へ對し御年禮を申し上げ其外攝家公家百官  
 の方々に一々年始のお禮を述べ勿論お土産物は就れも莫大  
 なものでございませぬ夫より本國寺へお歸へりになつて八日は  
 京都をお立ちにおつて直ぐに大津へお出でになり豫ねて申し  
 付置かれたるお船へお召され湖永を渡つて九日に江州安士へ對  
 して登城をいたし三法師君へ對して御年禮を述べ御幼君にも  
 至極御機嫌宜しく厚きお言葉をお頂戴いたす其時に秀吉より御  
 進物等に於ては惣て信長公御在世の時少しも變らぬ御幼君



太 閤 記

であるから之を削ると云ふ事はありませぬ誠にごうも其邊は  
 届いたものであつた前田徳善隠玄以法印長谷川丹後守へ對し  
 ても厚き年禮を述べ扱一應御用濟になつて秀吉長谷川丹後守  
 を招き秀丹後早速相尋ねるが清洲の信雄殿は何日順御年始  
 に参られしか又岐阜の信孝殿は何日頃お出でになりしか兩公  
 定めて此地へ御越しにまつたであらう丹後守頭を下げ丹  
 尋ねてございませぬが今以て御願公共御年始にお出ではござい  
 ませぬ秀フーン歳暮の御祝儀は参られたか丹後守ういたし  
 て御年始にさへお出でななき位歳暮おどは兩方もお出でにな  
 りませぬ秀ハ、アして見ると兩郷とも歳暮年始ともお出でが  
 ないか勝家は遠方にして之は是非もあいけれども流川一益は  
 勢州桑名に在り定めし歳暮年禮に罷り越したであらう丹  
 う仕まつりまして御名代さへお遣はしにたりませぬ位秀之

太 閤 記

はごうも怪しからん事では信雄信孝の兩公は兎も角も流川一益  
 までか三法師君へ對し年始の禮もいたさざると云ふは捨置か  
 れざる事御幼君なれば上を憂しろにするのいたし方是非とも  
 之は料さあければならんと直ぐに之れから先づ第一番に尾州  
 春日井郡清洲の城へ對し石田佐吉三成を遣はし勿々安土へ對  
 して御年禮として御幼君の御機嫌伺いに登城いたすべき由申  
 し送る三成は畏みまつて既に清洲表へ對して罷り越し信雄信  
 孝に面會して右の次第を言上に及ぶと信雄は驚いて此人は至  
 つて弱ある人ゆゑ何事によらせ物に恐るゝの質でありませぬ  
 へ右の通り殿重なる秀吉よりの催促に依りて大きに驚ろき目下  
 病氣なれば延引をいたしたか全快次第早速罷り越すに依つて  
 秀吉へ宜しく取りあしを頼むと云ふ事では此方は臆病だけに穩や  
 かの挨拶をした然るに同時に臨坂甚内安晴へ仰付られ之は



大 閤 記

州渥美郡金山岐阜へ遣はされましは甚内に於ては家來を従へまして岐阜表へ罷越し早速か目通りを願ひ暫らくあつて案内にて運れ甚内奥へ通り様子を見ると正ににふ出にふるは神戶三七郎殿兩側には家來が扣へて居りまする 信筑前守の使者甚内罷出でましてございます側から披露をいたす 信甚内如何ある用意あつて之へ罷り越したるか勿々に要談を其場に於て述べる様いたせ 甚恐れながら麗わしき尊顔を拜し恐惶至極に存じまする主人秀吉の命に依て當地へ罷り越したる用件と云ふは餘の儀にも候らば君には年改まり未だ安土へ年禮に御越し之れなき由甚た以て怪しからん事若たるものが右様に天下發亂を惹起すの基ひなり依つて勿々安土表へ御出であつて三法師君の御機嫌を伺つて然るべく存じ筑前守秀吉より

大 閤 記

此段を申し上げる 信歇されし神戸信孝に對し安土へ登城いたして三法師の機嫌を聞けとは何だ三法師は乎の爲めには切ではないか本來おれば先方から叔父上御機嫌は如何でござると罷り越すなきが至當だ然れども幼年であるから捨て置くのには今日に至つ三法師の機嫌を聞く爲めに登城をしると云ふ剛も秀吉が申し付けとは怪しからん事だ遂に叶つて今日秀吉は京都所司代を命せられ中國の探題職を勤め居ると雖も其古しへは馬の口を取りたる下賤の藤吉是までの間重役を冀しうにして我儘の振舞をさせし事は余も存じて居る立歸つて後圓の秀吉に申せ第一人の非を認る秀吉が如何かれば此處へ年禮の爲めに登城はいたさん斯く申す信孝を如何心得て居るか秀吉に之へ參れと申せ甚内此時に恐入つて下るかと思ひしに左はなくして 甚之は意外の仰せを蒙り甚内肯請恐



大 閤 記

れ入り奉まつる今日筑前守秀吉の命令に依り越したる某  
 し御用あれば秀吉に對し改めて御談じになつて然るべし、あれ  
 ども叔父朝と云ふは私の中今日右大臣信長公御遊去あらせら  
 れ其御跡を頼がれ給ふ處の三法師君なれば假令朝なりと雖も  
 も大切なる御方然るに其君に對し當城へ登城をせいとは何事  
 も大か上たるもの體を亂すに於ては下必がず亂だる、信十  
 二入らざる事を申す奴た我に向つて無國の一言彼是いたすに  
 於ては手耐に及ぶぞ、其之は怪しからん甚内今日はお手耐を  
 願つて罷り越したるにあらざれば登城の儀をお勤め奉  
 まつらんが爲めに主人の命に依つて罷り越したる者を獲りに  
 御手耐にあすとは何事なるか假令ば御手耐にあらうとも申す  
 べき事を申さぬ譯にはありません若し遠て安土へ御登城相成  
 らんとあれば是非に及ばぬ主人筑前守秀吉又取計らう方もあ

大 閤 記

りませう御免と云つて甚内其儘に悠々として下る其様子を見  
 て信孝彌よ、皆りを上げられ、信儀が穢なら其家來まで恐  
 ろしい奴が來たと怒り切て居ります内、此脇坂甚内に於ては  
 其儘立歸る跡で勿々老臣方一同を集めモウ三七郎信孝に於て  
 は色青ざめて居ります處へ罷り越したるは平手壹岐守、國分  
 佐渡守、柴信濃守等何れも好い家來であります、信汝等を今日  
 招きしは餘の儀にあらす、今日筑前守秀吉より脇坂甚内安晴を  
 以て云々新様、申し送らる實に悪むべきは猿面郎秀吉最早  
 死すべきにあらざれば之より勿々軍の用意に及べ少しも猶  
 猿の首を切らんと存すれば勿々に出軍の用意に及べ少しも猶  
 豫いたすべき場合でない速かに支度をしたせ、此時平手壹岐守  
 夫へ進み出で、登御尤もにございます戦いなす場合には少  
 しも猶豫いたすべき事にあらざれども併しながら當時の勢い



太 益 是 實に廣大にして尋常に之を耐んとするは却つて當方へ不利  
 に至り御勝軍さの見込み充分に之あれば勿々御出軍あつて然  
 るべし成れども其の見込みは如何 信必らず我孩の首を討て  
 見せる第一江州長濱には柴田伊賀守扣へ居り夫より北國北の  
 庄には柴田勝家あり又吾卿し命を充分に我を助けるに相違  
 あり又勢州桑名には瀧川一益あり我に組みし大軍を  
 以て事を爲すに何の難き事やあらん 我をいたすべき協合て  
 ない」と云ふ ○「アイヤ暫く 信難じや」と云つて振返つて御覽  
 になる之を即ち神戶の家老の一人峯信濃守前へ進み出で  
 きて 峯只今の仰せは勇に逸しと云ふと云ふべき事にて御心急  
 いては宜しからぬ暫時某しの申す事を御聞き下され度夫れ職  
 ひと云ふものは充分に手當をして勝つべきの見込みを定めても

太 関 記

太 尚ほ心を安んずべきものにはあらず然るに今迂濶に只だ少勢  
 の加勢を頼みに兵を起すと雖ども秀吉の方にも又大軍あり第  
 一常國大垣には池田勝入齋父子あり又岩村に稻葉伊豫守入道  
 一徹齋父子あり郡上に遠藤大隅守之れ何れも無二の筑前守身  
 方にて又江州佐和山には丹羽五郎左衛門瀬田には山岡筑前守  
 あり之皆秀吉に心は寄せるものにして卒と云へば此軍勢悉と  
 ありとあらん柴田勝家が北國北の庄より討て來るや容易の事  
 なく敵とあらん柴田勝家が北國北の庄より討て來るや容易の事  
 にあらん殊に只今は雪深くして進むを得ず來年四五月の頃比  
 にあらざれば中々同勢を送る譯には往か彼是いたして居る  
 内に却つて敵の爲めに破らるゝの恐れありされば一旦の勇に  
 逸り身方の勢を頼めて都に攻上ばらんとなすと雖ども中々筑  
 前守の同勢を破ぶる事能はず先づ只今御出軍の儀は御見合せ  
 あつて然るべし」と峯信濃守辨舌滔々と述立てました當に峯信



大 閑 記

漫守ばかりでない夫に居並んだる老臣の面々暫時思ひ止まる  
 様にと様々に謀むると雖も性短氣なる三七郎信孝一旦思ひ  
 出したる事を其儘にして止むべきものであいなれども出軍の  
 儀は到庭受取ないに依つて然らば都へ攻め上る事は暫時見合  
 せ此上は籠城の用意をいたせと云ふ老臣替るく諫むると雖  
 ども一向聞かず今は是非に及ばぬ茲に稻葉山の城には國分佐  
 渡守隆常圓兵九郎正景岡本佐渡守定則を大將として三千餘人  
 瑞龍山の寨には織田新八郎信兼平手壹岐守秀胤峯信濃守頼親  
 を大將として五千餘人岐阜城には齊藤玄蕃頭稻葉兵部大輔岡  
 本五郎左衛門桑田彦左衛門柳九郎左衛門桑原彦右衛門以下宗  
 徒の武士七百餘人其勢一万餘人三七郎殿の御旗本より二の九  
 三の丸の門や櫓を受取り充分に籠城の用意を為す秀吉何兵を  
 以て寄せ來るとも之に當らんと待構へて居る此方は臨坂甚内

大

第九席

大 閑 記

立歸へり秀吉に右の趣きを述ぶると秀吉樂爾と笑ひ之で謀事  
 成就せりと早速松田右衛門尉杉原七郎左衛門に兩人を清洲に  
 遣はし茲に信雄を大將として軍さ立に及ぶの事話し  
 寶寺には注進櫓の崗を引くが如く秀吉は豫て此位の事はあら  
 うと云ふ見込みがありまして伏て神戸信孝が腹を立てやうと  
 するから臨坂甚内を以て右の次第を申し入れた處案の條軍さ  
 立に及びましたと云ふ趣むきであるから秀吉早速杉原松田の  
 兩人を招いて秀其方等只今より難波時の裏道を越えて清洲  
 へ罷り越し信雄に面會して斯様く述べる様に申し付く兩  
 人は委細現まりて早速仕度をいたして從者も漸々四十名許り  
 を從へ難波峠と云ふ間道を打越えましたる事にして清洲へ出  
 り越し秀吉の使ひとして兩名來りたる由を申し込ると信雄



太 閤 記

此間石田佐吉を以て年禮の事で談じられた其後は甚く秀吉を  
 恐れ居る處へ再び兩名参つたと云ふから大いに驚ろき早速  
 而會をいたすと云ふ事で直ちに案内をいたし正而には北畠信  
 雄を扣へ左右に家來の面々處へ徐々と罷り出でましたる兩名  
 の顔を見るより北阿名共此度の使ひ太儀に心得る秀吉如何  
 なる事を申し出し早く云つて聞せてくれ立腹をいたして居  
 るか 兩人罷はしきを拜し恐悦至極……北左様な事はさう  
 でも好い秀吉が何と云つたかどう云ふ事で兩名を遣かはされ  
 たか 阿今日我々共罷り越したるは餘の儀にも候はず安土に  
 お在であさる三法師君……北ア、夫は聞た〜モウ病氣全  
 快をいたしたから近日罷り越す心得秀吉へ其事を申して宜し  
 く取做してくれ近々の内に三法師の機嫌を聞きに参る年禮に  
 は延引いたしたと云つて秀吉立腹をいたして居るのであらう

太 閤 記

どうか其方等宜しく取なしくれ 然るに假しくれとは意外ある  
 事で我々今日罷り出でたるは左様を儀ではございませぬ矢張  
 其件に就て御當家へ遣はれましたる備者同様澁州岐阜の信孝  
 公へ申し上げたる處以ての外のお憤はりで却つて使ひの者を  
 逐ひ返し其上のみあらず此度金華山岐阜表に於て軍立てを遊  
 ばされ御反謀の企てある由 北ウーム 松目下軍馬調練足馴  
 らし怠りなく充分其手配をいたして居るとの由今にもあられ  
 土表へ人数を進め三法師君へお手向ひをする様子に相見いな  
 する秀吉早速に之を誅すべきには候へども信雄公も信孝公も  
 即ち御主人筋であります然るに秀吉が此件に就て采配を取  
 り岐阜表へ罷り出るは甚だ心苦しき事願くは太守に於ては只  
 今より其軍馬を進める惣大將となつて神戸三七郎信孝を御征  
 し下さる儀に願ひ度く秀吉の儀は御選圖に従ひ軍馬を卒て御



太 閤 記

奉公は仕まつります何卒惣大将の任を御勤め下さる様願ひ度  
 存せらる之を聞くと平常からさうも信雄公信孝は不仲でござい  
 まして何時でも信孝の爲めに一步譲つて居りまする詰り自分  
 が人が好かから何時でも割を食て居る處へ此度は総大将にあつ  
 てくれ送國に従ひ秀吉が働らくと云ふのだから北畠信雄は大  
 きに喜び面色忽ち直りまして左も嬉しうに少しく席を  
 進め北信孝此度年禮にも出でず却つて罪さ立をいたして安  
 土へ人数を進めると申すか松左様尙ほ日ならず北國よりし  
 て柴田勝家大軍を率ひて之に身方を爲すと云ふ同時に勢州桑  
 名には瀧川一益も之に對して縁に繋がり居りまする故に人数  
 を出し加勢をいたすに相違ありません北畠立歸つて秀吉  
 に左様申せ只今より斯く申する信雄總大将にあつて之を攻め  
 忽ちちにして彼を首と爲して天下を鎮むる心三法師坊年な

太 閤 記

れば其方に於て好く其心を慰さめくれ余は總大将にあり神戸  
 信孝を必らず攻め亡ぼすであらうと之は秀吉の旨いので假令  
 何れでも主人筋に當つて居る神戸信孝に對して秀吉が采配を取  
 て敵對と云ふ譯に往かない夫ゆゑ少し赫かして北畠信雄を大  
 將として其身は帷帳の内にあつて事を仕やうと云ふ秀吉が策  
 畧でございませぬ其處で兩人の使將大に寫んで暇を頂戴し  
 て歸り直様軍さの用意をいたし信雄に於ても繰出すと云ふ事  
 にあり其さうも嘘さど云ふものは一通りではございませぬ筑  
 前守秀吉も其神戸信孝を征するに清洲の北畠信雄を以て總大  
 將にするると云ふ事を思ひ通りに参りましたから己れに於ては  
 影ながら采配を取る此度先手へ向ひたるは筑前守の舍弟羽柴  
 美濃守秀長と云ふ人でありませぬ其手に屬したるは丹羽五郎左  
 衛門峰谷出羽守之は稻葉山へ對して人数を進め播州路より山



太 閤 記

崎寶寺夫より京都岐阜安土まで其間へ馬田官兵衛淺野彌兵衛  
 荒木兵太夫等の一人々が向稻葉一徹齋池田勝入齋等は龍龍寺山  
 の城に向ひ夫より高山右近木輪山城守生駒新助原長門守  
 一柳市助等を甲賀蒲生の山々石津多藝の峠傳に勢州に切て  
 入るべき威勢を示しましたさう斯うする内に北畠の同勢も繰  
 出しました岐阜表はモッ充分に取圍みまする事故機に上つて  
 神戸信孝小手を騎して八方の様子を見ると驚へたさうも山も  
 畑も平地も敵兵ならざるはなし流石の神戸信一且は怒た様  
 ありの扱斯うなつて見ると驚へた此撤退では五日や十日の  
 軍さなれば出来やうが長く籠城をする譯には逆も往かまい北  
 國より来る柴田の同勢は四月五月の頃ならでは間に合はぬ  
 名の瀧川一益は前申し上た通り元より己れの了簡のある事ゆ  
 え來つて神戸信孝を救ふと云ふ譯はありません然るに柴田勝

太 閤 記

家此事を餘所ながら承知いたしたから大に怒つて直ぐに人数  
 を出さなければならぬ佐久間玄蕃亟に申し付け人数を繰出さ  
 せんとしたが中々雪深くいたして急には進軍をする譯にいか  
 かい斯う申し上げると何と云ふかと思し召すお方もございま  
 せうか北國の方を御案内の方々は好く御存知てございませ  
 雪の頭になりますと實に家も理まる位で何にも商賣する事も  
 出来なから只だ女房をいじめて子供でも拵らへて居る位な  
 れば其代り好い子供が出来ると云ふと金も産れたと  
 大層喜ぶが之は婿郎に賣つて了う又品物が付て居ると斯んか餓  
 鬼は百にもならないと腹に打き付て骨を知らかにして角兵衛  
 はする越後國の人は助骨が一本足らまいと云ふが今の人には  
 左様おのほりません右の次第ゆゑ出軍をする譯に往かまい  
 から仕方がない北國に居ながら傍觀をして居る流石の信孝も



太閤記

軍事をすする計りのみ勝を据えたが箸を取るゑどが出来あひ此  
 時に至り信孝の家來に於ても夫れ御覽あさいましと云ても今  
 更御主人を嗜なめると云ふ譯にも往かないからせうも固つて  
 居る信孝に於ても仕方があいかから大勢を城内へ集めて軍儀評  
 定を爲す信孝一同の年寄どもに向ひ信此度は予が短氣にし  
 て新様軍さ立てを仕たる處猿面の秀吉早くも軍馬の催促をし  
 て目に餘る大軍を以て當岐阜の城を取圍み茲に戦ひを開くと  
 唯ども勝つの見込みもあいか此上は何かいたしたら宜しいか  
 各々腹臆あく其處に於て申し上りませす只今に至りまして如  
 進み出で、案恐れながら申し上げます  
 何いたしたものであるかど仰せられませす  
 む総り未だ時至らざれば暫し御扣へ下さる様にどお止め申し  
 た時にお待ち下されば斯様お事はないと申し上げたる處六日

太

閤

記

の舊暦十日の菊とやら云つて返らざる事此上共我々共が申  
 し上る事を御聞濟み下されば某し聊さか考へまする處を言上  
 いたします佳夫れだから信孝の誤りであるど先刻より申す  
 ではあいか如何すれば宜しい案されば此上はいたし方ござ  
 いません、筑前守秀吉に和談をするが一番でございませす  
 一、和談をする案使ひを以て先方に和談をする事にあれ  
 秀吉とて決して否やは申しませすまい和談を遂げしより二ヶ月  
 なり三ヶ月なり經ちませす内にはハヤ雪解の頃に相成りませす  
 れば北國表より軍馬を自由に進める事が出来ませうから一時  
 此方より和談を申し込んだ方が宜しからんと存じます  
 は信濃守殿の御一言ではあるが和談をする譯に往くまいと存  
 じませると云ふを何ある者かど見れば之又家老の一人國部佐  
 渡守でございませす案ハア、佐渡殿には何で和談が出来ない



太 閤 記

と仰せらるゝか 佐北國の雪解を待つと云ふ仰せでござるが  
 中々秀吉は只だ欺つて和談をすする位の事では承知はいたしま  
 すまい何れ秀吉より人質を望むに相違ない 望仰ではござる  
 が之はどうも佐渡殿の御鑑定が違ふ、どうも人質を望むとは  
 出来まいナせと云ふに筑前守は今も何であらうと元は家來  
 筋御主人より家來が人質を取ると云ふ事はあい 佐成程人質  
 として取らないまでも秀吉の事であるから何か考へて味方の  
 勇氣を挫く様な事をするに相違ない「平手壹岐守夫へ進み出で  
 又其時の事として兎に角少しも早く和談を申し込んだ方が宜  
 からう若し一日でも遅れば夫が爲めに軍馬を損じ難  
 を失ひ恐らく難儀をいたす何の道と和談をするにも一日開戦す  
 れば先方の勢いが餘程強くなるから尋常にては和談が出来な

太 閤 記

い餘程制の悪い事になる何でも戦いを開かぬ内に早く其事を  
 遂げた方が宜しい 案成る程夫はさうだ然らば此和談の使  
 に往くものは誰れが宜からう 至其使には斯く申する壹岐  
 の家來に馬場喜右衛門と云ふものがござる此者が江州佐和山  
 の城主丹羽五郎左衛門と悉く親しくして居るから此喜右衛  
 門を遣はして向ふの様子を尋ね秀吉が如何ある條件を付るか  
 秀吉の付けたる條件に依つて再び評儀をいたしたら宜しからう  
 信さう云ふ機會があるれば早速其喜右衛門と云ふ者先方へ遣し  
 たら宜からうと茲に評儀一決して夫れから平手壹岐守の家來  
 陪匠ではありませすが馬場喜右衛門と云ふものに委細申し付け  
 られて秀吉の陣中へ参る際にありませんから丹羽五郎左衛門  
 の許へ参りまして長秀に面會をして扱爾々かう云ふ譯へ  
 ぞうぞ和解をしたいたから取次下されたいと云ふから 丹主



太 閤 記

人が何と申すか分らんが一應お扱ひ申すと自分の陣中へ暫ら  
くの間喜右衛門を待たして置て丹羽五郎左衛門筑前守の前へ  
罷越して右の次第を細やかに告げた莞爾笑ひ 秀さうだ大方  
さうたらうと思つて居た余の思い通り和武を申し込んだ其儀  
早速承知いたす承知いたすが就ては人質を取らなければなら  
んけれども残念ながら余は織田の家來筋であるから苟且めに  
も亡君の公達を人質に取る譯にも好かん依つて某しの留む處は  
神戸信孝殿の御公達を一方お附の者を一人之を今よりして安  
土表へ移し三法師君の許に於て御奉公したら仔細かからう御  
主人の處へ家來が往て御奉公をするのだから少しも差支いあ  
からう其儀承知されば勿々に公達を安土表へ移し参らすべし  
若し不承知されば是非に及ばん此和談は承諾する譯あは好ん  
右の次第を先方へ申し遣はせ 丹委細長こまりましたと五郎

太 閤 記

左衛門は立歸り右の次第を馬場喜右衛門に申し述べ喜右衛  
門早速立歸り云々斯様と先方の答の趣きを申し述べ其  
處で一同再び評議をいたしましたが之を承知する事お出來な  
いと云へば語り軍さは手切れに取る又どうも之は承知しあ  
譯にはいかか秀吉の許へ人質に取られる譯ではあいからさ  
う云ふ事あれば御公達を一方安土表へ遣はしたるが宜からう  
と云ふ事にあつて其處で三歳に於る御公達を一方夫に乳母女  
中方を以上十二名がお供をして此喜右衛門の案内に依つて丹  
羽五郎左衛門の陣へ至り又五郎左衛門より秀吉の本陣へ之を  
伴ひ直ぐに夫れから御案内を申し上げて江州安土へ伴ない  
参りました此御運枝は即ち竜丸殿と申し上げて後に織田左  
衛門尉秀則と仰せられ御年頃になつて世の中の味氣なきを嘆  
してモウ武士は止めると云つて四十二歳の時に剃髮して名



太

閑

記

前を宗爾と仰せられた人までございます、切秀吉に於ては茲に於て和談をいたし勿々に陣拂ひをする事になりました、自分にては一旦京都へ引取直ぐに参内をして此度戦ひにあらんとし、たる處幸ひに事穩便に治まりたる次第を奏聞に及ぶ一同の方々、秀吉の念の入りたる事をお尋ねに相成る暇早の城下に於ては先づ之で好いと一同ホッと思を吐き軍さ立てを一旦いたし、ましたるも悉く解散をいたしました、右の由柔名の瀧川一益の許に聞へましたからモウ暇早表に於ては軍さ立があるたらうと思ひました、が何分門徒の同勢が起つて居りますから一益は城を離れる誰にいかない心あらぬも傍觀をして居りました、和談になつたに云ふ事を聞て大きに失望をいたしました、其内に神戸信孝の許より使ひが参りました、から早速之に面會をして、此度は如何なる事を以て和談をいたされたか、使されれば斯

太

閑

記

様くの譯で秀吉逃かに和談を承知いたしました、一承知いたしたに就て人質を遣はされたか、使、イエ人質は取られませぬ、一益之を聞て喜び、一之はさうも神戸殿にはお手柄であつた、人質を取られては仕方はいが人質を出さず和談と云ふは實にさうも何よりの喜びであつた、使秀吉方へはさう云ふ事はございませぬ、が御連枝を一名安土表へ對して一時お預けにありました、夫が爲めに勿々向ふに於ては人数を引上げました、之を聞くに瀧川一益目の色を變へて持つて扇面を落し、一ア、又猿面郎に計られたか、彼は自分の方へ人質を取る事が出来、さいから御連枝を安土表へ遣はし三法師へ奉公をさせると云ふは實に驚ろき入つた、るいたし方之取りも直さぬ人質を取られたも同然だ、安土表へ人質を取て置て今に秀吉必らず暇ひを、するに相違ないから斯く申する一益か其事を知れば安土表へ



對し人質は取せまいもの今更申した處が是非に及ばん之と申  
 ずも信孝の短氣の爲めに斯様なる謀事に陥入りたりと一益に  
 於ては悉く嘆息をいたしました此方に於ては北の庄の柴田  
 勝家も此間から都の様子が知れて居るから早く出軍をいたし  
 たいが何分雪に埋められて兵を出ず事が出来ぬ其内に強よ  
 居る場合でいさよつて勝家雪を蹴立て、出軍をいさよんと  
 した時に恐るべきは女でございます勝家の御意所と云ふは其  
 前淺井長政の妻にして淺井家亡びて此婦人が姿を隠して居る  
 のを勝家其色香に迷ひ之を娶りまして悉く愛して居ります  
 出軍を仕やうと云ふ時になると此婦人がいさよと云ふ明日に  
 うとすれば此雪でございませうから明日にあさいと云ふ明日に  
 出るど明後日にあさいと云ふのでツイ婦人の爲めに

太 閤 記

する事が延引いたして居りました恐るべきは婦人で木曾義仲  
 程の人も妓女の色香に迷ひ栗津の原の露と消へ新田義貞は勾  
 當内侍の色香に迷つて遂に越前の黒丸に於て命を失なふたる  
 程おれば鬼の如き勝家も女の愛に溺れて何分にも出兵をする  
 事が出来ぬ此方は秀吉此猶欲をして居る間に軍馬を調のへ  
 却て逆害に致すと云ふ茲に筑前守謀事の成就致すの一條  
 第十席

北國七州の藩鎮柴田修理進勝家は大勇無双の人でございます  
 がさうも此の女の爲めには心の亂れまするものと見え江州の  
 戦いは其取沙汰頻りにありますから一日も早く越前に出發  
 しませれば好いのには何分御意の色香に迷ひ之が爲めに  
 悉く延引いたしました兎角する内に来る注進もく悉く  
 秀吉の勢ひ竹を割るが如くの有様でございまして濃州岐阜へ

太 閤 記



太 閤 記

取詰めると云ふのであるからモウ之を忽にいたして置く時  
 には一大事出来いたすと勝家に於ては天正十一年二月一日に  
 越前の北の庄を即ち出陣いたしまして江州へ出陣と云ふ事  
 に決定をいたしました就ては加賀能登越中を始め自分の支配  
 下に居りまする處の諸侯を集め軍儀評定をいたさなければ相  
 成りません茲で回状を以て人々を集めました然る處勝家の回  
 文に應じまして追々北の庄へ集まると云ふ事にありました中  
 にも越前府中の城主前田又左衛門元人元より信長公の御高  
 恩を蒙りたる人であるが越前の府中に居りまするが故に北  
 の庄に居る勝家の部下の如く相成つて居りまするが利家と云  
 ふ人は好く先君の御恩を思つて居る人がござらる近頃よりし  
 て勝家女に迷つて出陣の機を延びいたすと云ひ且又家來長九  
 郎左衛門の意見と云ひ利家疾より病氣と云ふて府中の機に引

太 閤 記

籠り居ました然處右の回状故家來の長九郎左衛門を御招に相  
 成りました九郎左衛門御前へ罷り出でますると邊りの様子を  
 見て判九郎左衛門此處勝家より回状を以て北國諸侯を執  
 れも北の庄へ集めて江州へ出兵に就て評議いたすとの事であ  
 るが如何いたしたものであらう九エ、夫は矢張り病氣と致  
 して北の庄へ参らん方が得策の機に思ひます尤も此處筑前守  
 秀吉を討んが爲めに勝家殿兵を出すと雖も我身方の勇氣を  
 挫く様なれども逆も勝家の勝利は兎東ない秀吉は三法師の君  
 を保護いたして尙ほ其他の諸侯を以て無禮を働らさたる神戸  
 三七郎信孝を攻めると云ふは之れ當然の事で瀧川一益柴田勝  
 家が共同一致して只だ筑前守を仆さんとして居るとも秀吉は  
 此處上は十萬万乗の君の嵐禁を安んじ奉つる下は悉く人民  
 を懐け實に五畿七道穏やかに治めて居れば兵を出して幾程秀



太 閤 記

吉を討たうとしても此上の勝利は免れぬ様に思ひます  
 上に於ても濫りに御出馬をいたせば却つて前田の家を断やす  
 様なる事に相成れば此儘にいたして只だ病氣と申してお出  
 なさん方宜しうございます 利しかし只だ病氣と許り云  
 つて出あいで秀吉の勢ひに驚いて一旦約束をした事を忘れ  
 利家人數を出さる様思はれては好ないが何か名策があらば  
 施よして呉れます様 九イエ何にも別つに名策とまうす様  
 かみどもございせんとお人御ひでございませから獲りに人  
 か入る事が出あひ然る處へ御子息能登の七尾の城主前田  
 孫四郎利長御出でに相成りまして餘人でございせんから九  
 郎左衛門も席を譲る 利之は孫四郎であつたか如何心得て  
 城へ來つたか 孫久々にて親人にも鹿はしきを拜しまして利  
 長身に取如何ばかりか大慶に存じ奉まつる尙ほ旗頭たる柴

太 閤 記

田勝家よりの招に應じ北の庄へ只今より罷り越しまする心  
 承たまはれば近頃は御病氣どの事なれば早速罷出でました  
 只今の御様子と云いお肉色の様子では御病氣とは此利長には  
 見にませんが全く御病氣で入らせられたか 利イヤ病氣  
 に相違ない病氣なれば北の庄より招かるゝと雖も未だ  
 其事は決定いたさる中推して参つた者であらうか又聊さか  
 でも快よく相成つて罷越さうか只今九郎左衛門に聞て居たる  
 處 孫恐れながら御全快に相成つてお出でにありました方が  
 お宜しうございます 利ウソ 孫お父上は如何思し召すかは  
 知りませんが此度柴田勝家よりいたして軍馬催促をいたし只  
 今より江州へ出發をいたす之れ御幼君を保護いたす譯ではな  
 く直ちに己れの遺恨を晴らさんと云ふ心底ならんければ勝  
 家が雪解を待つて出軍をする事は秀吉非凡の大將あれば必ら



太

閑

記

す勝家が出陣する位の事は存じて居りまして尤分に此仕度も  
 調のつて居りますに相違ありません夫へ御所に御越し相成る  
 は甚だ危き事此度は御病氣を幸ひお出でかからん方が宜し  
 うございますすけれども病氣どのみ申しては勝家元より嫉妬の  
 人でありますから不審を起してさうでもない秀吉に内通をい  
 たし居るが故に出兵を遅刻いたしましたなご、思はれては往けま  
 せんから彌よ、人数が江州表へ参る時には御越しに相成ら  
 せとて仕度さへしてお出で遊ばせは宜しうございます 利併  
 し其方の見込みでは此度の戦ひは勝利であるか 孫、先づ十の  
 處は八九は敗走をいたしませうか 利、十の八九は敗走をする  
 とはさう云ふ譯を以て 孫、左様でございます今人々の噂さを  
 聞くに先達てより父上の病氣と云ふは内々秀吉へ裏切をする  
 積りならんご聞者を入れる事懸たゞし父上なればあう今日ま

太

閑

記

て散て忘秋歌の樂しみもせず盃を忍びて家來を集め酒を飲ん  
 で御ひを一つ遊ばした事もなければ勝家も何と思ひ居るか知  
 れません又身方の者に目を付けて云ふは最も大切なる事身  
 方を疑ひ且事を起すに至つて人々のみ頼みにいたす様なる事  
 では大層なしまする譯にはなりません此當家に於ても故右大  
 臣様よりして一方からん恩顧を蒙りたる家と承たはる勝  
 家とて申せば織田家の家來父上も矢張り織田家の家來かと  
 存じます今日越前に滞城して御在でに相成りますから何か  
 幕下の諸侯の様に相見えませぬが相並んで事をいたして  
 べきか利長只今より北の庄へ罷り越して勝家の舉動を窺ひ  
 様子を見上へ御通知いたしますから父上は御出馬なき様願  
 ひます只だ其の出馬の様子を示せば宜しうございます見もゆ  
 れ菅公の血統勝家如きの幕下に附くべき家ならぬ何卒此利長



太 閤 記

に對し以來何事も御任せ下さりませれば如何ばかりか有り難  
 き仕合せに存じますと莞爾と笑ひなすつた 利ッソ 利長好く  
 申してくれられた我れは人数の用意をいたす汝能越して好く勝家  
 の意中を探り通知せよ其時によろ速かに事もいたす 孫 孫  
 我こまり奉まつります九郎左衛門お側に扣へて此様子を聞て  
 居りましたるか 九ア、實に御若年とは申しながら孫四郎判  
 長殿の仰せらるゝ如く狼りに馬御無用に存じますと密談  
 も終りましてから茲に蓋を翳げ酒を飲むも成るたけ家來の者  
 にも匿してお出でなさる利長は之れから直ぐに一千二百の  
 勢を率いたる事にして府中の城を跡にして遠く越前北の庄の  
 本九へと乘込みになりました處が第一番に着いたしました案  
 内に述べられて席に通りて正面には勝家扣へて居り其側には家來  
 の面々居並ひしが勝家利長を見ると席を立ち 勝ヤア之は前

太 閤 記

田利長殿か今日は第一番の乗込み祝着に存する其後利家には  
 病氣の由と承知いたしましたが兩三回之を相尋ねると雖も餘程  
 重体の様なれば痛く心配をいたし居た父の病氣は如何であら  
 孫エ、御言葉に預りまして利家恐れ入り奉まつる今老いたり  
 と申する此の年にはあらねども此兩三年は思にも哀ろへ今日  
 の如きは大熱往來をいたし難儀いたすの場合實に當城へ對し  
 父を同道いたさんど心得府中へ能り越し面會を相求め候處某  
 がしを見て何者が來りた云ふ事も分り兼ねる場合かれども  
 利家申すには必らず此度江州へ御出兵に相成る時には舊來の  
 交誼先陣を仰せ付られ度由を申し又自分病氣の爲めに罷り  
 越す事能はざる其時には斯く申する利長不肖に候へども先陣  
 の儀を相頼み必らず第一番に進む様に申し付けられましか  
 何卒斯く申する利長へ對して慈面寇者秀吉を討取る戦いに而



太 閤 記

い候節は先陣を某しへ仰せ付けられ下されたし 勝ア、イヤ  
 誠まことに利長には勇ゆうあり義ぎある大將たいしやうあれど此度このたびの先陣せんじんは佐久  
 間ま玄蕃げんぱん盛政せいきやうには申し付たれども其許そのもとには玄蕃げんぱん盛政せいきやうを助け秀  
 吉しゆきちの首くびを取とる事を第一だいいちにいたす様よう又また利家りけも聊ちやうさかふりども快  
 よく相成あひあひり候まう御ごりは早速さつそく江州えしゆ出兵しゆへいの事を其方そのかたより申まうす様よういた  
 せ 利り委い細こ段だんみまり奉ほうまつる然しからば某たがしは二陣にじんになるも是非是非  
 に及およばん事こと佐久間さくま玄蕃げんぱん盛政せいきやう殿でんは大勇たいゆうあり殊こと更さららに御ご縁えんの御方ごかた  
 ゆえ之これを除のぞけて第一だいいち番ばんを乞こひまするも如何いかと心得こころえてお言葉ことばに  
 従したがい第二陣だいにじんを預あづかりますと云いふ處ところへ追おひ北國きたくにの大將たいしやう方かた之これへ参まゐり  
 ます而しかく勝家かつげより豫あねて此度このたび出兵しゆへいの旨こころ意いを述のべ今日けふ軍いさ立たを  
 して直ただぐに出い出で軍いの用意よういをせんければありません其處そのところで先陣せんじんは  
 佐久間さくま玄蕃げんぱん盛政せいきやうと云いふ事に相定あひまり二陣にじんは能登國のうでくに七尾ななおの城しろ  
 主しゆ前田まへだ孫まご四郎しやう利長りぢやう三千人さんせんにんを卒すまいて進まり三陣さんじんは淺井あさい吉兵衛きちべゐ則政すねまさ

太 閤 記

四陣しじんは山田やまだ惣左衛門そうざゑもん友信とものぶ五陣ごじんは越前えちぜん本郷ほんきやうの城主じやうしゆ安井やすい左近宗清さこんすけむねきよ  
 六陣むじんは加州かす御幸ごきやう塚づかの城主じやうしゆ吹上ふきあが五兵衛ごべゐ秀益しゆえき其次つぎが勝家かつげの本陣ほんじん旗はた  
 元備もとづかには水野みづの助兵衛すけべゐ國春くにはる三千人さんせんにん遠藤とんどう彌や四郎しやう秀澄しゆじやう次つぎは越前えちぜん松  
 山の城しろ主しゆ柴田しばた三左衛門さんざゑもん勝政かつまさ三千人さんせんにんを卒すまて夫そのとに加くはり脇備わきづかへは  
 佐久間さくま久左衛門ひさざゑもん安次やすつぎ中軍なかつんは越前えちぜん未盛みせうの城主じやうしゆ不破ふた彦ひこ三元春さんげんはる次つぎ  
 は加州かす小山こやまの城主じやうしゆ原喜はらき四郎しやう氏次うぢつぎは拜郷はいきやう五左衛門ござゑもん秀光しゆくわう三千  
 人にん後陣ごじんは水野みづの新九郎しんきやう信安のぶやす八百人はちひやくにん遊軍ゆうぐんとして佐々ささ陸奥りくお守成政しゆせいきやう  
 四千人しよせんにんを卒すまいて脇備わきづかへを助すけける次に長森ながもり五郎ごろう八柴田やちばた權六郎ごんろく勝  
 久ひさ金村かねむら與左衛門よざゑもん武次ぶつぎ是等これらの人々ひとらは一手ひとての大将たいしやうであります  
 尙なほは近頃ちかごろ抱かかへたる浪人なみのり組ぐみの人々ひとらは青木あおき勘兵衛かんべゐ原勘はらかん七戸しちほ嶋藤しまふじ  
 兵衛べゐ増見まけみ彌平やへい次つぎ磯貝いそがゐ八郎はちらう是等これらの人々ひとらは浪人なみのり組ぐみとは云いひまがらは  
 又また人数にんず充分じゆぶんに相從あひまりへ勝家かつげに同道どうだうをいたして此度このたび江州えしゆへ出軍しゆへいを  
 いたすと云いふ處ところが佐久間さくま玄蕃げんぱん盛政せいきやう先陣せんじんに兵へいを進しんめ彌々やや出發しゆつぱつ



太 閤 記

をいたしたるが固より勇氣に早ります佐久間玄蕃より兵を  
進めて難所切所の厭ひなく木の芽峠を越して十六日の道を二  
日にして押し来りました處が中々どうも其昔しの軍人は鉄の  
若物を着て居るから夫れで思ふ様には武者押しが出来ない然  
れば甲州流でも北條流山賀流でも一鼓六足と云つて先づ平地  
の武者押しなら一日に五里山路から三里と云ふのが軍列であ  
ります夫をナンと十六里半を二日路と云ふのだから先づどう  
も一日八里九里位づゝ越して来たのですから悉く疲れた  
を働かし又は後ろより刀を引抜きて兵を脊打にするど云ふ是  
ではどうも兵が疲れて云ふ事を聞かないゆゑ二日にいたして  
江州柳瀬と云ふ處へ着しました長濱には自分と不中でありま  
す處の柴田伊賀守勝豊は病死したが其臣神谷越中守匹田左近  
不被甲斐守等が長濱の城を預り居るから第一番に長濱を自分

太 閤 記

の物にいたし伊賀守の家來は昔な追拂つて其上にて軍を立て  
を仕やうと云ふ了簡で柳瀬へ乗込んで彌よく此處に於て用  
意充分にいたしました此度前田又左衛門利家に於ては前田利  
長より注進して出兵の用意はいたしましたが出ては來ませ  
んと云ふのは元より孫四郎より利家は病中なから出軍いたす  
と云ふ事を觸らしめて置て内々に出軍してはならんと通知しま  
したからでございします處北國勢追々江州へ乗込むと云ふ注進  
櫛の齒を挽くが如くに秀吉の元に参りませ、秀吉は心待に斯う  
なるのを待て居りまする位だから北國よりいたしし彌よく  
柴田勝家出でたりとあらば此間より戦ひを開きし瀧川一益を  
少しも早く討つて而して勝家は討たんければあらんと之れから  
自ら采配を執つて一益を討ちまする彌よ戦ヶ嶽戦ひの緒口で  
ございませ



太

閤

記

世に忍むべきは瀧川左近將監一益でございます。瀧川の岐阜に  
 神戸侍従信孝は籠城の手當をして筑前守の先手の爲めに難儀  
 をいたして居るにも拘らず少しも之を助けるが爲めに加勢と  
 云ふ事もおあい具だ。其身は桑名に在りて龜山の城、桑名の城、島の城等  
 へ人数を配り少しも深州へ兵を出しませんのは初めより丁簡  
 がゆるからで筑前守秀吉と柴田修理進勝家はソモ成立よりし  
 て何となく不和でありました。今日になり彌よ、吳越の思  
 をいたして居りまするがモ、遂からず勝家人数を出すに相違  
 ない軍さの場所は何れあるか豫じめ江州路でわらうが一人は  
 勝家一人は秀吉なれば此度の戦ひには容易ならぬ事、世の眞  
 にも兩虎相争ふ時は一方必らや斃るといふから一方は斃れる  
 に相違ない其時もうは負けたるもの、吊ひ合戦と云ふと名と

太

閤

記

して勝つたる方を攻め亡ぼし自分天下の執權となり三法師  
 君を押退けて神戸信孝に天下を握らせ自分其執權職を司と  
 ると云ふが底意でございました。から岐阜の軍さを始め北國よ  
 り勝家人数を出さうがトンと餘所に見て居りまして自分だけ  
 の兵を殿重にいたして居りました。此伊勢の瀧川と秀吉とは勝  
 家が出馬いたします。前から戦さを始めて居たので其邊念の  
 爲め申し上げて置きます。一益は桑名を取て下知をいたし第一  
 番に龜山の城には佐治新助關大藏を大將として三千人牧野の  
 城には瀧川儀太夫有友、白木六郎左衛門三好左内、青地主殿之等  
 を大將として三千騎を置き一益は桑名に在りて長嶋の城には瀧  
 川源八郎一輝、清水彦四郎を始として五千人の兵を置き又旗本  
 には日置五郎衛門谷崎重左衛門、山路九郎太夫等を一手の  
 大將と定め惣人数二万六千七百人にて充分に手配りをして置



太 閤 記

きなば不意に秀吉の人数が来て之をかれは抑さへると云ふ事を考へて手配りをいたしたるのちれども今岐平には神戸信孝あつて越前よりは勝家兵を出すと云ふなれば急に此勢州桑名長島へ對して秀吉人数を進めまいと考へて居ると俄かに桑名城に於て騒ぎ立ちたるの様子何で城内は斯の如くに騒ぐかと思つたが其等であります前申し上げたる黒田官兵衛義孝小川土佐守一柳監物是等を大将として六千人の同勢にて進軍をいたし又蜂須賀彦右衛門堀久太郎秀政千石權兵衛秀久種田長門守等を大将として六千の同勢を卒たる事にして龜山の城へ向ひまする一々此事に就てお話しもありますが大畧じて申し上げません軍さ計りして居ては必懸みにありませぬ此へ参りましたるものは豫ねて智者の聞に取られたる大谷平馬吉隆、木村小隼人と云へる者之は間道より寄せましたが筑前守秀

太 閤 記

吉は好く此邊の案内を心得て居りますから之を名々に教へ置きたるものと見ゆる又秀吉に於ては三千の同勢を引率爲して淺野彌兵衛は一千三百人を卒ひ中川漸兵衛を先鋒として出軍をいたしました五色の吹流しを押し立て金の千生驛の馬印しが日に映じ輝やき来ります有様と云ふ者は又別段でございませぬ瀧川一益は案に相違いたしますと云ふ秀吉は北國より乗込んで来る柴田勝家を防がなければならぬから伊勢へ對して斯う俄かに攻来るまじと思ひしに俄かに桑の城長島の城へ對して人数を進めましたる様子ゆゑ充分に備城をいたする猶豫なく一益に於ては桑名に在て下知を傳へまして谷崎重左衛門矢曾九郎太夫岡部重春を大将として之を防がせる而々に於ては此度猿面郎の首を取て功名せんと聞の聲を作つたる勢ひと云ふものは實に勇ましき有様城外に於ては筑前守の軍馬駈



太 閤 記

たゞしく旗馬印し風に翻へり日に映じ関の懸天地を動かす時  
り谷崎重左衛門は橋に上つたる事にして八方を見渡せば野も  
山も皆羽柴の軍勢真先には五三の桐の旗を立てましたる事に  
して金の瓢箪三十六を束ねたる吹流しを押し立て、此手の大  
將は羽柴於次丸秀勝隊に續いて中村孫兵衛、加藤孫六義明等を  
大將として六千餘人の同勢之は岐阜の城に向ふ高山右近の同  
勢に長嶋の方に進軍をいたす様子を之を見るとき谷崎重左衛門  
アツと驚いたるは此の如くに一時に兵を進めると云ふは柴田  
勢の乗込まぬ内に速かに瀧川を亡べすの羽柴の心懸をらんぞ  
推ししましたからでございませう今羽柴方の先陣中川瀬兵衛清秀  
紺地にハス形の附たる旗二流れ翻へし金の唐人笠の馬印しを  
押し立て瀬兵衛清秀馬上に在つて士卒に下知をいたし進め  
と呼ばはる有様續て九曜の付たる旗二流れを翻へし金の向輪

太 閤 記

の馬印しを押し立て是又人数に於ては二千餘りを卒いたる事  
にして長岡與一郎忠興之に續いて生駒精谷或は平野權平等同  
勢三千餘人にて其後陣を預つたるの様子でありませう此度中央  
の方には五色の吹流しに千生瓢箪の馬印しが日に輝やき渡つ  
てキラめく有機重借て筑前守に於ては陸上を乗込み於次丸  
秀勝は船路を來り總攻めにするの心得に相違なし猿面那秀吉  
人を侮むより自身に兵を出したるは幸ひ秀吉の首を取るは此時  
なり秀吉の首を取つたるものは今日第一番の大功なりと呼は  
つて此時手廻はりの同勢に於ては少勢なりと雖も谷崎重左  
衛門を始ゆとし矢曾九郎太夫の人々に於て勢を一手に籠めま  
したる事にして城門をサツと開いて人数を出したり中にも雑  
兵を討つは無益あるぞ筑前守秀吉の首を討ち取るべしと言ふ  
を重左衛門之を聞て莞爾と笑ひ重元より敵面の首を取るは



太 閤 記

今日なりと呼ばる處へ岡部兵之進も同じく一手の同勢を纏め  
 谷崎に續いたる事にして秀吉の本陣五色の吹流しを翻がへし  
 たるを目當にて討て参りしする處が右に五色の吹流しを翻へ  
 し又左りも前も後も皆五色の吹流し金の千生瓢箪の馬印しで  
 イヤせうも其美麗なる事夥たしく何れが秀吉の本陣あるか  
 少しも見分が付きませんからいたし方なく勿論どうも秀吉の  
 是は得意とする處其内に秀吉は大音な舉げたる事にして秀  
 軍さは勝利あるぞ早く此處を打破つて瀧川一益の首を得よと  
 下知を爲したる事にして長岡與一郎忠興蜂谷出羽守の同勢が  
 進み來つて大に谷崎の同勢を破るから谷崎の同勢は散々に亂  
 れて來る此時に一人抜んでたる一將朱を以て總身を染めたる  
 かと怪しむ計り大音の姿に相成つて薙刀を馬の平首に据へた  
 る儘に大音を舉げ ○某よりは谷崎重左衛門の郎等にして山

太 閤 記

路九郎太夫と申するものにて候なり卒來りたる處ろの同勢我  
 現へたる薙刀の味ひを見せくれんと呼ばる處へ此方の陣より  
 一人馬を乗出したる者あり紺糸の鎧に同じ毛糸三枚鐵の兜を  
 頂き鹿毛ある駒に鐵鞍置て打跨り槍を馬の平首に付け大音を  
 上げたる事にして ○ヤア 中川瀬兵衛清秀の舍弟にして  
 中川秀則此處に扣へたり是へ來て尋常に勝負せよ 山ヤア聞  
 及んだる中川秀則あるが相手に取て不足おしと山路は忽ち  
 の間に其處へ馬を乗出し秀則と暫くの間一往一來と互に鎗さ  
 を削つて居る七裂八鐵とは此事で暫らく打合て居る其間に如  
 何ある隙かあつたりけん秀則が一突股の邊りを突いたる事ゆ  
 九郎太夫馬上に堪らぬ其處へさうと落ちたる事にして秀則  
 も馬上より下り忽ちまぢ山路の首を取て再び馬に乗らうとする  
 處へ山路の家來其主人の首を渡すあと大勢此處へ迫り來る處



太

閑

記

の有機流石の秀則たりと雖も多人数の爲めに己に危く見へたる處へ乗込み來りたるは中川瀬兵衛清秀人間無骨と云ふ給人間無骨と云ふは大層な大言で人間を突くに骨が無いやうに突けると云ふ事で瀬兵衛の鎧は人間無骨と云ふ之を持って敵兵を切立てたから秀則も勇氣を増し敵兵に於ても忽ちの間に切り立てられ何れも谷崎の陣中へ還歸るから谷崎重左衛門も之はさうも筑前守の同勢を破る事は出來ない得心たるから兵を纏め俄かに引鐘を鳴らしたる事にして其儘に引上げましたから寄手に於ては棒々を取詰めました此處に瀧川一益の家來に小曾助友と云へる鐵砲の名人があります之は長岡與一郎と砲殺してくれやうと強込めを爲し與一郎に向つて狙ひを付た長岡與一郎此様子を見て馬上ながら少ども驚ろかき左りの手を以て胸を叩き此處を打てくと呼はるから小曾は大に怒り

太

閑

記

之はさうも人を侮せりたるいたし方ヤツカ打すには置くべきかど一發ゾドンと打つたるに與一郎は當らず續いて打たる丸も外れたから小曾助友大に驚いたる事にして我今まで打つたもの一ツとして外れし事なかりしに此人はのみ當らざるは不思議なり此者天明某しの丸先を避けると云ふは誠に稀れある人は是は百發打つとも打ち得る事叶ひ難しと其儘にして其處を退身いたした随分呑氣な人で二發打つて當らまいから百發打つても當らないと云つて引込んで終つた忠興に於ては馬染かから大口開いて大笑し飛道具を以て英雄を打つと云ふは卑怯かり今一度現れ出でよ其首を引抜きくれんと大音を擧げたりされど小曾は姿を隠して了ひました然る處平野權平長安に於ては此人強弓を取ては名譽の人で此戦ひに平野權平瀧川一益の兜を落ししますると云ふ御よく是れから賤才の取ひとなり



ます一條

第十一席

太 閤 記

元より兵を迅速に用ぬまするの筑前守秀吉の軍さの致し方  
でございませぬさればにや龜山峯の兩城を落すや否や前申し上  
げましたる通り柔名長濱へ軍勢を進めました海陸の兩道より  
して大軍を以て桑名の城を攻めましたから一益殘念に心得此  
度は充分に此城に於て戰ひをいたすべき心得でございませぬ  
れども運が傾く時は是非に及ばんものて願みに思つた龜山峯  
の兩城とも落城をいたして其上に彼の大軍に取巻かれました  
事ゆゑモッ充分に城中の用意をいたして其時は瀧川彦次郎一  
廣搦んで惣太將一益に御意見を申し上げるの斯る大軍に  
取巻かれし以上は一度江州海東郡餘江の城へ御引上あつて勝  
家が北國より寄來りし時共に羽柴を討つ方然るべしと御意見

太 閤 記

申し上げたおれども一益は之を用ぬませぬ 臣イヤ顔面冠者  
秀吉の首を取るは此度によりと表に勇氣を顯はすと云へども  
心の裡には一益大に心配をして居る處へ筑前守の先手中川瀬  
兵衛清秀峰谷出羽守順隆等の一手ハヤ大手へ取詰めましたに  
就て此處に防矢の用意をいたしました中に伊勢國で強弓の名  
人ど云はれたる小林直八郎正道木藤藤左衛門繁房の兩名を大  
手の櫓に上せ矢は山の如くに積上げたる事にして均しく打番  
へく射下し暫らくの間此處にて防矢をいたす一方には瀧川  
彦次郎一廣日置五郎左衛門が討死の覺悟を爲して城門を閉  
て討て出でました眞先の方には白地に紺の三木爪を顯はした  
る金の立置の馬印しを押し立てたり其時に金の向雀の旗二旗  
れ翻へし兩手合せて一千七百餘の同勢にて寄手の軍勢に渡合  
ひまして暫らくの間血戰いたして居ると雖ども目に餘る大軍



太 閤 記

追々之に乗込み来りし事ゆゑ木藤藤左衛門、小林直八郎先  
 手の亂れたる様子を見て扱は先手方には敗れたりと見ゆるぞ  
 と引詰めて射て下す尤も郎等に於ても弓矢取ては手練の者  
 共が大手の櫓に於て射掛けまする大矢之が爲めに大手は防て  
 居る、う斯うする内に前申し上げましたる平野權平長庚は強  
 弓の名人でありすから此有様を見て物々しやと自ら強弓に矢  
 を番へ小林直八郎を射て落し木藤藤左衛門も見事に射て落し  
 ました此兩名を射殺ろしましたから是にて大手櫓は破れに相  
 成りました其時に日置五郎左衛門瀧川彦次郎は先手に進んで  
 之を防て居りましたたが逆も叶はじと思ひ置ころなく兵を一纏  
 めにいたしましたる事とございませうが其時はハヤ同勢は殘  
 り少な相成りましたのは敵に討れたるもあるべく又生捕ら  
 れましたものと見ねますさう斯うする内に夜に至りますと

太 閤 記

軍に於ては一時引籠を鳴して羽柴の同勢は桑名の城を遠巻  
 きにいたして居る様子引上で参りましたる一同皆く多くは  
 敵に討たれました瀧川彦次郎一廣は血縁血がひになつて一益  
 の前へ罷出でました彦恐れながら申し上げ奉まつる此の通  
 りに相成り候上は此上とも明朝は筑前守力攻めにいたすか但  
 しは今宵夜討ちを掛くるか何にしる最早防失いたす事には  
 相成りませんサア前々申し上げたる通り只今より壘江の城に  
 御上りば然るべし彼の城は要害充分あり殊に岐阜に近かけれ  
 ば三七郎殿よりして御加勢もあらん鬼に角是へ御引上あつて  
 宜しうございます一ツーン一同の者はせうじやと云ふ片邊  
 に扣へて居りましたる佐治新助青地主殿白子六郎太夫始めと  
 して孰れも一益の力とあるべきものでございませうが一同に壘  
 江へ引上げて然るべしとあつて一益も今は是までなりと思は



太 閤 記

召し茲で桑名を引上げると云ふ事にありましたるが夫れには  
 城外に羽柴の同勢取詰め居りますから其處で水門を開て夫よ  
 り逃れ出る事にあり彦次郎は勿々水門口を出て一船の船を用  
 意いたしました尤も是には青地主殿瀧川備太夫佐治新助瀧川  
 彦次郎其外十六名にて此處を引上げました水夫と云つた處が  
 睡れも居りません佐治新助が少しは船に馴れて居りませ  
 ら新助が船を船を夜の内引上げました尤も此船許りじやあ  
 りません大勢の者が水門口から引上げましたのでございま  
 す前々も申し上げましたが此城攻をいたすと云ふても元より  
 四角あものを四角に攻めると云ふものではあ一方だけは免  
 して置きませんと夫が爲めに城内の者が必死に相成つて戦ひ  
 をすれば一人死を極むる時は十人に當り十人死を決する時は  
 百人に敵すると云ふ懸へもありませ又窮鼠却て猫を噛むと云

太 閤 記

つて一方を開けて置かければ此處で死んで了うと云ふ事に  
 なるど却て身方の不利益にありませから水門から一益が逃出  
 すと云ふ事は秀吉承知してわざと開けて置いたのでございま  
 一益に於ては秀吉の陣を振返つて 一ア、某しも勢州桑名上  
 州前橋両城兼帯一度は關東の管領とまでなりし者が彼の猿面  
 の寇者お謀られて今夜此處を退散するかと殘念に心得て振り  
 返へり見れば齊々堂々たる秀吉の先手二番手三番手が桑  
 名の城を遠巻にいたしたる有様と云ふものはさうも物凄計  
 りでございます瀧川左近將監一益は桑名を跡にいたし引上げ  
 ましたる事を秀吉はサモよろと思ひ先手に下知して十六日早  
 天に桑名の城へ乗込ませました處がモウ一益の家來は一人も  
 居りませんから直ぐに秀吉も入城し一同の者は勝軍のお喜び  
 を述べました然る處豫ねて間者に出し置きたる兵夫へ参りま



太

閑

記

して 兵、只今北國の同勢、江州柳ヶ瀬へ覆々々乗込みました。と  
 一伍一什を遣進いたしました。秀吉之を聞くと、莞爾と笑ひまし  
 て、秀ア、さうか。モウ大抵来るだらうと思つて居たが、其先手  
 が柳ヶ瀬まで乗込んだるか先んずる時は、人を制し返るゝ時は  
 人に制せらるゝと茲に秀吉は早速出馬の用意をいたしました。け  
 れども其時に秀吉はモウ北國より柴田勝家が来ると云ふ事は  
 豫じめ知つて入らつしやるから、勢揃ひをして繰出すのも速か  
 でございませう。第一番の先陣は筒井伊賀守定次七千餘人、軍師に  
 は鳥左近友之、松倉右近勝重、兩人の勢二十餘人合せて九千餘人  
 第二番は神谷越中守、大鱧藤八、徳永石見守三千餘人、之は長濱の  
 柴田伊賀守の家来、あれども伊賀守は不幸にして病死したれど  
 も此者等は秀吉に降りたるを以て之に加はる次に、赤松次郎則  
 房、蜂須賀彦右衛門正勝、同じく小六二千七百餘人、第三番は木村

太

閑

記

市助直盛、淺野彌兵衛長政、生駒甚助親正、小手官兵衛孝高、明石與  
 四郎則遠、三千餘人、第五番には木下勘解由左衛門、同じく將監大  
 塩金右衛門、山内猪右衛門一豊、黒田吉兵衛長政、中村孫平次一氏  
 合せて一万二千六百餘人、第六番に高山右近太夫長房千五百餘  
 人、第七番に堀久太郎秀政、仙石權兵衛秀久千六百餘人、第八番は  
 赤松彌一郎則友、神子田半左衛門千七百餘人、第九番に桑山修理  
 亮廣長、長岡興一郎忠興三千餘人、第十番に中川瀬兵衛清秀、羽田  
 長門守義真二千八百餘人、第十一番は三好孫七郎秀次、小川土佐  
 守金光、大谷平馬吉隆、熊谷内膳直賢三千二百餘人、第十二番に羽  
 柴美濃守秀長、羽柴於次丸秀勝一万二千五百餘人、第十三番に總  
 大將、筑前守秀吉の旗本にして加藤虎之助清正、石川兵助直友、平  
 野權平長泰、加藤孫六嘉明、福島市松正則、脇坂甚内安治、糟谷助右



太 閤 記

して 兵、只今北國の同勢、江州柳ヶ瀬へ發々々乗込ましたと  
 一伍一什を注進いたしました秀吉之を聞くと莞爾と笑ひまし  
 て 秀ア、さうかモウ大抵來るだらうと思つて居たが其先手  
 が柳ヶ瀬まで乘込んだるか先んずる時は人を制し運る、時は  
 人に制せらるゝと茲に秀吉は早速出馬の用意をいたしましたけ  
 れども其時に秀吉はモウ北國より柴田勝家が來ると云ふ事は  
 豫じめ知つて入らつしやるから勢揃ひをして繰出すのも速か  
 でございませす第一番の先陣は筒井伊賀守定次七千餘人軍師に  
 は島左近友之、松倉右近勝重、兩人の勢二十餘人合せて九千餘人  
 第二番は神谷越中守、大體勝八、徳永石見守三千餘人之は長濱の  
 柴田伊賀守の家來あれども伊賀守は不幸にして病死したれど  
 も此者等は秀吉に降りたるを以て之に加はる次に赤松次郎則  
 房、蜂須賀彦右衛門正勝同じく小六二千七百餘人、第三番は木村

太 閤 記

小筆人重綱、堀尾茂助吉晴、瀧野勝右衛門、三千餘人、第四番に一柳  
 市助直盛、淺野彌兵衛長政、生駒甚助親正、小手官兵衛孝高、明石與  
 四郎則遠、三千餘人、第五番には木下勘解由左衛門同じく將監大  
 塩金右衛門、山内猪右衛門一豊、黒田吉兵衛長政、中村孫平次一氏  
 合せて一万二千六百餘人、第六番に高山右近太夫長房千五百餘  
 人、第七番に堀久太郎秀政、仙石權兵衛秀久千六百餘人、第八番は  
 赤松彌一郎則友、神子田半左衛門千七百餘人、第九番に桑山修理  
 亮廣長、長岡興一郎忠興三千餘人、第十番に中川瀬兵衛清秀、羽田  
 長門守義真二千八百餘人、第十一番は三好孫七郎秀次、小川土佐  
 守金光、大谷平馬吉隆、熊谷内膳直賢三千二百餘人、第十二番に羽  
 柴美濃守秀長、羽柴於次丸秀勝一万二千五百餘人、第十三番に總  
 大將、筑前守秀吉の旗本にして加藤虎之助清正、石川兵助直友平  
 野權平長泰、加藤孫六嘉明、福島市松正則、脇坂甚内安治、糟谷助右



衛門武則、田屋右馬之助兼政、平野九右衛門政重、淺野八郎左衛門以下一万六千人、後陣は杉原七郎右衛門、荒木平太夫三千余人、兵糧小荷駄を奉行し、其勢都合八万九千餘人、孰れも江州柳瀬を差して出馬いたしまし、然る處北國先手の大將佐久間玄蕃丞盛正、江州柳ヶ瀬へ参り行市山へ本陣を据え、ましが勝家は未だ出軍いたしません、然る處前田孫四郎の陣中よりして横山九郎次と申するもの玄蕃丞盛政の陣所へ來つて對面を求めます、る玄蕃丞盛政に於ては早速面會をいたすのゝ話しは次席

第十三席

此佐久間玄蕃丞盛政と云ふ人は至つて勇猛無雙の人物でござります、す、けれども其例には智謀もない人と見へる、只今九郎次を招きましたから九郎次は將几近くまで罷り出でました、玄蕃は其時流目に九郎次を見て居たが、玄前田孫四郎の家來横山九

郎次とは其方あるか何等の用事あつて斯く申す、玄蕃允盛政の許へ來たる勿々に要件を述べ、九、エ、申し上げます、事は餘の儀にも候らは、主、人、利、長、昨、夜、より、大、熱、往、來、いたしまして、今朝に相成り、兼、用、手、當、を、いた、す、と、唯、も、何、分、に、も、其、熱、度、追、々、増、す、許、り、察、す、る、に、雪、を、踏、ん、で、北、國、を、出、で、當、地、へ、進、軍、仕、り、ま、す、る、節、に、寒、氣、に、打、れ、ま、し、た、も、の、と、相、見、ま、す、何、分、に、も、滯、陣、仕、ま、つ、り、ま、す、譯、に、な、り、ま、せ、ん、か、ら、一、先、づ、歸、國、を、仕、ま、つ、り、能、登、の、七、尾、の、本、城、へ、引、取、り、手、當、を、仕、ま、つ、り、全、快、の、後、來、つ、て、羽、柴、の、同、勢、を、打、破、り、た、く、と、主、人、よ、り、の、申、し、出、で、聞、て、玄、蕃、允、盛、政、大、口、開、い、て、ア、ツ、ハ、ツ、ハ、と、笑、ひ、出、し、た、玄、ツ、ン、利、長、殿、に、は、國、を、出、る、時、に、は、先、陣、を、も、望、ま、れ、し、位、で、あ、り、か、ら、最、早、其、場、合、に、至、り、猿、面、冠、者、秀、吉、の、大、軍、を、以、て、當、柳、ヶ、瀬、へ、出、陣、い、た、し、た、と、い、ふ、を、承、知、い、た、し、て、臆、痛、風、に、勝、は、れ、し、も、の、と、見、え、る、武、士、は、戰、場、



太 閤 記

へ進むからは聊さかなりとも退陣いたすまじきものあるを歸國いたしたいと云ふは耻を知らんいたし方此場に至つて虚病を構へて歸國いたすと云ふ心底に相違ない管家の末葉天満威徳自在天神の苗裔ありとて常に廣言拂はるゝ者が如何ある事だアハ、と殊の外打笑はる時に九郎次 九之はさうも佐久間殿の御一言とも覺へざる儀でござる隠病風に誘はれて國表へ歸るおどきは怪しからん利長は左様な者ではござりません併し人は病ひの入物と云ふ俗に譬へのある通り今日無事長久を祈るども併し病ひは何時發するか知れんもの作病を構へ國表へ誰れが歸へりませうか全く隠病風に誘はれたの作病だのと申し召すから佐久間殿御自身利長の陣へ御越しあつて實地御檢分下されたたい 玄ッン盛政罷り越しても苦うないか 九

太 閤 記

作病か何かを御實檢下されたし 玄宜しい然らば玄番早速能り越して利長殿の病氣の様子を尋ねるぞ全く病氣と云ふ事なら仕方がない屹度往くから利長に左様申してくれど不満の体九郎次は莞爾と笑ひまして 九佐久間餘程御立腹の様に心得ますかどうか御實檢の上隠病風に誘はれしか全くの病氣かお見分下されたしと其儘我陣へ立歸る利長に於ては奥の一間に家來を集めて酒を呑んで居る處へ九郎次が 九只今歸へりました 利九郎次如何いたした 九イヤモウ病氣だと申し上げるとヤレ隠病風だの作病だのと云ひますからさう疑ぐるから来て實檢を願ひたいと申した處夫れは早速陣中へ實檢に来ると云ひました 利アハ、來るかあ 九那の通りでございませすから來るかも知れません 利さうか夫れでは酒を呑んでる譯に往かないと外の家來を呼んで左右の腕を固く結ばせやう



大 閑 記

としたから 家腕を結つてさう遊します 利どうしても好い  
 から早く結ば其處で終日御酒を上つて居らつしやつたものだ  
 から顔あどは眞赤で全で熟柿の様に夫へ白衣を纏ひ家來に申  
 し付て大いある夜具頭から被つて寢所にウソク 時鳴つて居  
 た兎角して居ると佐久間玄蕃允盛政此處へ來おければ又幾分  
 か値段があるのだが若し作病あら一ッ利長を驚かしてやらう  
 と云ふ己れを計ると云ふみどを知らないで自分氣に入りの儲  
 師周龍と云ふ者を召し連れ前田利長の本陣へ参りましたか出  
 でに相成二たと云ふ事ゆゑ九郎次夫へ罷り出でまして 九之  
 は 先刻は太い御無禮を仕まつりましたさうか直ぐに 佐  
 夫じゃア案内仕まつれと案内に連れて奥へ通ると云つた處  
 が取場でございませうから萬事測つては居りません利長はウ  
 ソク 唸つて居る九郎次夫へ出まして 九御主君へ申し上げ

大

閑

記

まする先手の大將佐久間玄蕃允盛政殿お出でに相成りました  
 ウソク 唸つて居たが夜具から少し顔を上げたのを見る  
 と眞赤だ 玄ホー成程横山九郎次の申した通り大熱往來をし  
 て居る様だなさうじやない三日も四日も酒を呑んで赤くあつ  
 て居る處へ頭から夜具を被つて居たから眞赤にあつてる 玄  
 利長殿には如何いたした合戦間近にあると云ふ今日に至り利  
 長殿には病氣と云うは身方の勇氣を挫じく處早く手當をいた  
 して身方の勇氣を付ける様いたされたい 利ヤア之は佐久間  
 殿好くころふ見舞ひ下し置かれし事生前の喜び之に如くもの  
 かし此度は某しも一命覺束ないど心得る 玄左様かな全体何  
 處が悪いので 利夫が最初は此風氣であつた 玄成程 利風  
 邪ど心得て居る内に追々大熱往來いたし今日と相成つては眼  
 眩がする 玄ウソク 利どうも此耳鳴りが非常で 玄ホー、



太

閑

記

耳鳴りがいたす成程 利其内に肩が凝る 玄何にしても大變  
 た 利胃が痛んで…… 夫に又肺が痛んで居る様子腦は始終痛  
 めるし 玄ッ、ン 利夫れで痛氣の機で下痢があるさうも胸  
 が痛いふと又下腹が痛む處を見るを殊に依つたら脚氣傷心か  
 も知れない 玄元談じやアあい脚氣傷心では大變だ 利さう  
 も水氣は斯うあるし何處として痛まない處は一ツもない 玄  
 ヲ夫は大變だ」と連れて來つた周龍に脈を取らせて之はさう  
 も醫者は出來ないのだが前田孫四郎利長殿の手を抑へて見た  
 が兩脈とも感じがないのはさうでない二つ腕を組つて血の流  
 いがないから全く脈を失つたものと思ひ 周之は余程重体で  
 ございませす悉く脈が止つて居ります」と云ふ斯んを怪しい醫  
 者は今はございませせんが昔しは所謂お機嫌圖と云つて斯んな  
 のがあつたもので玄番之を聞いて 玄ッ、ンさうか夫は大變と云

太

閑

記

ふのを聞いて利長に於てはしてやつたりと思つて居る 玄作病  
 を構へたると思ひしに誠の御病氣では氣の毒千万然らば御隨  
 意になすつて薬用手當致される様 利ッ、ン、ア、此度柴  
 田殿に願つて先陣とまで思つた某し今に至つて此病ひの爲め  
 に命を捨てると云ふも残念ゆへ一時も早く歸國して薬用手當  
 を充分にいたし全快の上は早々出馬仕まつり秀吉の軍を片端  
 より打破つてお目に掛けるッ、ン、と利長唸り出して佐  
 久間玄蕃に於ては其様子を見て全くの病氣と思つたから利長  
 に歸國するふとを許した前田孫四郎利長に於ては直ぐに自分  
 の兵を一纏めにしてドン、と越前へ歸つて了ひまして七尾  
 へは歸らぬ府中に入つて父の利家に面會し 孫御父上此度は  
 お病氣と号して御出馬おさらんのは何よりの事某しも江州へ  
 若くと直ぐは病氣と云つて玄番允盛政を欺むき歸國いたしま



太 閑 記

したかぞうも筑前守秀吉と故右大臣の事を想へば幾ら北國に  
 居たからと云つて柴田勝家に付いて右大臣の御孫三法師君に  
 御敵對が出来やうか夫れゆゑに佐久間盛政を思ひ通ほりに欺  
 むいて歸國いたしました 利夫れはぞうも謀事が充分に參つ  
 たが併し斯うして居る内勝家より再び軍勢を出す様にと云は  
 れた時には如何いたしたものであらう 孫夫れは迂濶に出馬  
 の承諾を爲すつては宜しうございませんと御親子のお物語り  
 を側にて聞いて居りました長九郎左衛門之は技倆人でござい  
 ます 九御兩人のお物語り誠に恐れ入りましたが必らず此謀  
 事は成程いたすに相違ございませぬ一旦人數を出して見れば  
 勝家之へ迫まる事はございませぬ併し今に斯様いたして居り  
 ますと名智の秀吉でございませぬから必らず此度御引上げにお  
 つたる喜びを述べて参りませう 利ウーン筑前守が之へ喜び

太 閑 記

の使を遣はすと云ふのか 九「ハッ」と三人物語りをして居る處  
 へ取次ぎのもの夫へ罷り出でまして 取申し上げます只今江  
 州より羽柴筑前守秀吉御當家へ對して御使者でございませぬ之  
 は御進物でございませぬ夫へ持て参りました利家利長のふ二  
 人は夫を開いて見ると中に祝狀が遺入つて居ります此度江州  
 へ出馬を仕まつり勝家を助けんと利長公の思召しと存じ  
 候處俄かに病氣の爲めに御歸國なされしに故右大臣家の御思  
 を思召し付けられたること、秀吉此上もなく喜びに候御親  
 子御引上げに相成り候上は心に掛る雲霧もかし之は偏へに貴  
 泉より微臣筑前守秀吉を御助け下さるゝ處と思ひ候之は聊さ  
 かなる品なれども微臣より進上いたすにあらき故右大臣信長  
 殿よりの思召しに依りて御進上はしに相成る品なれば御受納な  
 し下され度く願ひ奉まつります之は秀吉が察いので此品物を



太 閤 記

右大臣家より下されるとあらば利家も受納するに心持が宜し  
 い又秀吉が利長が引上げたる事は問者を以て知りましたから  
 早速斯くいたしたるものでございませぬ然る處秀吉に於ては江  
 州柳ヶ瀬に北國勢集込み來たるふとは前より承知いたし既に  
 戦いの場所は賊木ノ本此邊りと云ふ事を心に思つて居り  
 ましたから秀吉江州賊が賊木ノ本等へ籠城の用意を充分にな  
 して山々谷々に至るまで防禦の支度をいたしました第一に大  
 岩山岩崎山へ岩を擧げて充分に手配を爲し流石の秀吉は有名  
 ある割普請を以て一夜の内に此大岩山岩崎山に寨を築たもの  
 と見え立した扱天正十一年三月十四日俄前守粗末なる衣服を  
 着て姿を變へ加藤虎之助清正福嶋市松正則大谷平馬慶隆竹内  
 與惣左衛門重成等を連れ夜に至つて主従僅か十一人で行市山  
 の衆へ上りました此ふ連れにありましたる竹内與惣左衛門重

太 閤 記

成と云ふは彼の有名なる竹中半兵衛重治の甥に當りまする人  
 を始終秀吉の手許に連れ置かれましたが伯父の半兵衛の教へ  
 を受けて好く兵學をいたします人でありませぬ秀吉は行市山  
 の衆に登りました時は十四日の月の爲めに四方は明らかであ  
 ります山に登るとは秀吉の尤も得意とする處は何の爲め  
 に登つたと云ふゆゑは敵の陣中を見る爲めで秀吉は今行市山  
 の衆より見下ろしますと實にさうも佐久間玄蕃の同勢堂々  
 として夫に繰出して居る様子秀ウーン行市山は佐久間玄蕃  
 の陣所と見えるを清正夫へ進み出で左様にございませぬ仰せ  
 の如く第一の要害たる行市山は盛政の預りまする處 特別所  
 山は誰だ與惣右衛門此様子を見て 與左様でございませぬ旗印  
 しの様子では別所山には大紋五郎左衛門の勢かど見へませ  
 秀ハ、ア山寺山は 與那は原喜四郎氏重 秀ウーン伊豆原山は



大 閤 記

與富永石見守の同勢が固ためて居ります。秀ウー長谷山は  
 與金森五郎八入道の人数でございます。大谷平馬  
 は夫へ出て参りまして、平左りに見えませう。大谷山は不  
 同勢でございませう。秀吉公は之を眺めて、秀成、大谷山は不  
 破彦三、元治が固めて居るやうじやア。ウー中尾山は惣大將  
 勝家の本陣と見え、なるな實に備へは充分だ。其旗元には安井左近  
 柴田三左衛門、跡も殿重に見れば、秀吉其様子を細々と見れ  
 ば、魚鱗鶴翼長蛇馬行を始めとして、何れも兵法に依つて充分に  
 備へて居ります。秀吉是を見て、感心致して、秀如何に與  
 惣右衛門其方は竹中半兵衛先生の許に在て能く軍法を辨へ居  
 るから、是を尋ねるが、此度勝家の陣はさうも中々兵法に熟した  
 る。搦へ方であるを運は、天に任せ、暇ひをいたすとば申しながら  
 御に秀吉此度は感心いたしました。と秀吉が斯う感心をいたして終

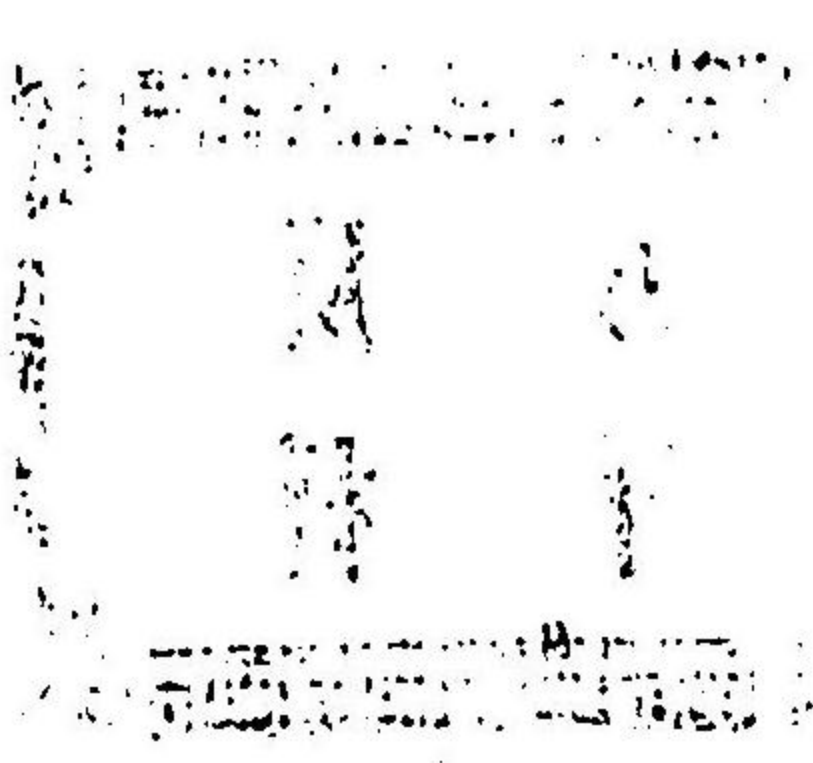
大 閤 記

つちやア困ります。此度の惣大將秀吉が却つて敵の陣搦に驚ろ  
 く様では仕方がないと思つて居ります。秀吉は敵陣の様子  
 を悉く見極め、早速に本陣に歸つて手配りの用意をいたす。茲  
 に天正十一年三月十一日第一に東野山、草部谷の要害には堀久  
 太郎秀政の同勢を登らせました。堂木山には山路將監正國一千  
 の同勢を率いて、此堂木山の要害を預りました。山路將監は柴田  
 伊賀守の家來で暫らくの間、江州長濱に居た處、伊賀守病死して  
 羽柴に降参いたしました。又此將監許りじやない。大鐘藤八、木  
 下半左衛門、富永石見守あとも皆秀吉に降参いたしました。ので  
 すから、此度堂木山の要害は殿重に預り居ります。同じく右の方  
 には大鐘藤八一段止の方には蜂須賀彦右衛門正勝、同じく左り  
 の方の尾崎には木村小半、人重、網取の山の要害より堂木山の麓  
 まで楓を搦へ、又一ツの嶺を搦へて、小川土佐守忠則をして之を



守らばせまじき此邊りは戦ひを爲すには最屈強の場所と心得て  
其任度をついたす、辰ヶ嶽に桑山修理介、羽田長門守、淺野備兵衛等  
第一の砦の要害を預る大岩山の砦には中川瀬兵衛清秀夫より  
八丁を隔てまして岩崎山の砦には高山右近友房の同勢を以て  
開へ田上山は羽柴美濃守秀長、天神山の砦には神谷越中守不破  
彦三、木下平左衛門山内猪右衛門、小寺官兵衛、生駒武助等を始と  
して、此外要害には充分手當をいたし、筑前守は旗ヶ馬場と云ふ  
處へ本陣を据へ、まじた所へ北の庄より柴田勝家出陣いたす  
事に相成つた處へ丹羽五郎左衛門長秀之に兵糧の用意を爲し  
たる事にし、て迎れて此地へ對し五郎左衛門乗込みに相成り仕  
度は充分に出來ましたから北の庄より柴田勝家の來るを待た  
て居た然る處に柴田修理進勝家に於ても茲に出馬の用意をい  
たしたる事にて中尾山の本陣へ乗込み敵の様子を見て尋常は

しては逆も事を爲す處に至らんと心得、佐久間玄蕃の許へ参り  
鐵砲組の頭、野忠左衛門と云ふものに謀事を授け、山路將監の  
許へ使節として遣はし、却つて將監懲りに迷つて、動心いたすこと云  
ふ山路將監腹心の一條





明治卅年十月八日印刷  
 同年十月十一日發行

〔天閣記卷十五〕



東京市淺草區公園第六區三號百四

桃川燕林事

講演者

蘆野萬吉

發行者

同市神田區佐久間町三丁目卅八番地  
 市川路周

印刷者

同市神田區表神保町  
 今成温平

發行所

東京神田區佐久間町三丁目三十八番地

文事堂

來 閣 記

文事堂 小説 新版書目

桃川燕林講演  
 今村次郎速記

赤穂 四十七傳

全十冊

桃川燕林講演  
 今村次郎速記

德川十五代記

全七冊

桃川燕林講演  
 今村次郎速記 現今

太閤記

一巻ヨリ十  
 二巻迄出版  
 來月ヨリ  
 大原堂發行

桃川燕林講演  
 太久保彦左衛門三郎

桃川燕林講演  
 佐倉宗五郎三郎

桃川燕林講演  
 梅川忠兵衛二郎

錦城齋貞玉講演  
 明治太一坊一冊

伊東陵潮講演  
 鬼坊主清吉一冊

桃川燕林講演  
 討鶴 權兵衛二冊

錦城齋貞玉講演  
 荒川武勇傳一冊

山崎橋お  
 傳合本  
 葛一冊

錦城齋貞玉講演  
 梅野由兵衛一冊

荒龍齋貞水講演  
 客會津の小鐵一冊

錦城齋貞玉講演  
 敵俊 徳丸一冊

桃川燕林講演  
 松前屋五郎兵衛一冊



<small>錦城齋貞玉講演</small> 石井常右衛門一冊	<small>錦城齋貞玉講演</small> <small>宮崎の</small> 白石嘶一冊	<small>錦城齋貞玉講演</small> 俠客三基内一冊	<small>屋牛舎桃林講演</small> 座光寺源三郎一冊
<small>双木舎菊遊講演</small> 明治太平記二冊	<small>松林伯圓講演</small> <small>高野長英</small> 渡邊華山一冊	<small>桃川燕林講演</small> 木戸孝允君傳一冊	<small>三遊亭四朝口述</small> 怪牡丹燈籠一冊
西郷隆盛君傳一冊	伊藤博文君傳一冊	大久保利通君傳一冊	<small>磯洲櫻枝講演</small> <small>探偵</small> 義太夫の仇討一冊
<small>松林伯圓講演</small> 源平盛衰記	<small>十返舎一九述</small> <small>東海膝栗毛</small> 中一冊	<small>錦城齋貞玉講演</small> 釋迦御一代記	<small>錦城齋貞玉講演</small> 瓶割典膳一冊
<small>桃川如燕講演</small> 桃川十八講談一冊	<small>伊東陵湖講演</small> 備前騷動一冊	<small>松林伯圓講演</small> <small>探偵</small> 女天一冊	<small>田邊南麟講演</small> <small>刺</small> 石童丸一冊
<small>錦城齋貞玉講演</small> <small>柳生</small> 荒木両勇士一冊	<small>田邊南麟講演</small> 岩見武勇傳一冊	<small>敵</small> 天下茶屋一冊	<small>小三</small> 娘節用一冊